自承應二年
至萬治元年

毛利十一代史

第二册

泰嚴公記

毛利十一代史卷之四

泰巖公記四

大田報助編

承應二年癸巳正月朔日公江戸邸ニ在リ諸規式ヲ行フ例ノ如シ

按ニ弘治三年洞春公吉田城ニ於テ諸老臣議シ歳首ノ儀式ヲ定メ永祿元年戊午正月始テ之ヲ行ヒ爾後相傳ヘテ今ニ至ル是日小座敷ニ出ツル家格ノ如キハ即チ當時稱スル所ノ小座敷衆ノ末裔ナリ

三日公登營將軍謁見献物如例無官之席順上杉喜平次公細川六丸ナリ其後官位ノ次第秀就公ハ少將上杉彈正ハ侍從ナリ無官ハ親ノ位次ニ準スルヲ以テ幕吏ヘ内議シ

三月三日ノ謁見ヨリ公上杉喜平次細川六丸ト改メラル

同日公閣老各家ニ至リ歳首ヲ賀ス又我諸家ノ證人登營謁見献物如例

十三日麹町芝口ノ市人八王子玉川ノ水ヲ府内ニ引ンコトヲ出願ヲ許サレ費用トシ

テ金七千五百兩ヲ賜フ是玉川上水ノ始メ也

十七日公上野東叡山ヘ詣ス

十八日將軍蘭人六名ヲ引見シ條令ヲ讀ミキカス

其文ノ大意ハ阿蘭陀ハ歴世通商ヲユルサレ毎年長崎ニ着岸セシム故ニ彼奥南蠻ノ如キ天主教ノ國ト通交スベカラズ（當時歐羅巴ヲ以テ奥南蠻ト稱ス）モシ親交ノ由他國ヨリ聞ユルニ於テハ通商ヲ禁スヘシ且ツ邪宗門ノ徒ヨリ日本ヘ取次一切スベカラズ又其徒ヲ船ニ乘セ來ルベカラズ永ク通商セント思ハヽ邪教ノ事ニヨリ聞ク所アラバ速ニ上告スベシ南蠻人邪教ヲ新ニ服從セシメタル國アラバ見聞ノ及ブ處長崎奉行ニ訴フベシ蘭人往來スル諸國ノ中ニ奥南蠻ト相通スル國アラハ其國名ヲ注シテ毎年來船ノカピタンヨリ奉行ニ呈スベシ唐琉球ノ船奪掠スベカラズ等ノ條々ナリ

十九日歳暮ノ内書ヲ閣老ヨリ下付セラル又我カ使者ニ奥服ヲ賜フ如例

二十三日國内屋敷究ニ關シ江戸ヨリ傳命アリ當屋敷奉行井上六兵衛ニ先屋敷奉行

一屋半左衛門ヲ加ヘ調査ヲ命セラレシトキ國老ヨリ下付セシ條書左ノ如シ

屋敷究之事

一拜領屋敷之事

一買屋敷之事

一買屋敷ニ罷居候ニ付テ屋敷被爲拜領候樣にと御理事

一上り屋敷預り候て居籠罷居候事

一上り屋敷預りにてかけ持に仕抱置候事

一地方田畠之内屋敷に被爲拜領候樣にと此中より御理被申上乘之事

一地方田畠之内屋敷に仕度と候て預りかけ持に仕抱置候事

付屋敷續爲何子細にて預り添候事

以上

承應二

正月二十三日

一私唯今罷居候屋敷表何間入何間（祖父親私）拜領仕候て罷居候所如件

年號
月日　　何　　某

老　　中　　え

一私唯今罷居候屋敷表何間入何間（祖父親私）何某手前より買申候て罷居候所如件

年號
月日　　何　　某

老　　中　　え

一私屋敷之儀先年何れ之所にて（祖父親私）拜領仕其後何某之屋敷替を仕或は何某え賣候て又何某屋敷表何間入何間買申而只今罷居候所如件

年號
月日　　何　　某

老　　中　　え

一右三ヶ條之外は手前之御理之品可被仰上候大形廉々ヶ條に相見候事

付屋敷御理有之衆祖父親之代にも屋敷拜領不仕候哉之事

付屋敷續拜領仕添候地之事

付屋敷續買添候地之事

付屋敷續爲何子細にて預り添候事

以上

二月四日將軍年十三初テ座所ニ寢ヌルヲ以テ閣老一人宿直ス公列侯ト皆登營榊香ヲ献シ之ヲ祝ス

七日幕府萬石以上ニ令ス左ノ如シ

一諸大名近年參勤之砌從者數多有之旨相聞別テ人數入用之事モ無之候間先御代之通可被召連候若急用之節ハ近國之面々へ可被仰付候此旨國元へ可申遣候以上

同日我藩石州津和野ト人沙汰之件ニ關シ老臣ヨリ一門以下へ奉文左ノ如シ

御國中と津和野人沙汰之議ニ付て從江戸被仰下候次第書立

一御國より津和野え走者有之時は先様いつれに罷居候通見届預ヶ置其上公儀え申出候者爰元老中より津和野家老中え申遣上にて可差返之通今度於江戸亀井能登守殿家老多胡久右衛門と相杜兵庫兒玉淡路約議被申定之由候條自今以後は走者有之候は時々公儀え申上御下知次第其沙汰可仕候爲内證猥に請取渡仕間敷之通御家頼中下々諸町人百姓等に到迄手堅可申渡之旨被仰下候條可被得其意事

一津和野より御國中え走者有之て先様より見届可預置之通申候は則預り置可申候左候て津和野老中より爰元各中え申來聞届於無子細者無異儀指返候へと各より可申渡候其上を以先様より請取に參候ものえ念を入可相渡候爲内證請取渡一切停止之事

一御國中より津和野え一旦走候て此方より無其沙汰内其身より罷戻もの有之は爲何子細にて罷歸候通時々此方え可申聞事

付御國より津和野え走り者有之時付届預ヶ置候時早速可相渡候通先様より申候共請取申間敷候勿論右之走者可罷戻と申候共内證にて不召返公儀え申上御下知次第之沙汰可仕事

付津和野より此方え走者有之時は右同前之沙汰たるへき事

右之通被仰下候江戸にては被仰替之辻少茂無相違様可被相心得候以上

承應二年
二月七日

堅　安房
國　備後
益　越中
毛　宮内

御一門中　與頭中
寄組中　郡奉行
町奉行　御藏元兩人
御膳夫頭へ　御歩行頭へ
御大工頭へ　御船手へ

櫻井市允へ　桂筑後へ
寺社奉行へ　村上七兵衛へ
御馬屋頭へ　市川九郎右衛門へ
檢斷頭へ

十四日御國目付石川彌左衛門石丸石見守長門へ出途の前將軍家黑印の令條寫幷開老ヨリ國老ヘノ奉文ヲ我青山邸ニ齎シ來テ公ニ示ス黑印奉文ハ齋藤左源太山田清太夫派遣ノトキト異ナルコトナシ此時兩使ヨリ毛利右京妹ヲ福原隆岐嫡左近ニ嫁ヲ傳フ本日ヨリ二十日ニ至ル大猷公三年忌氷上山ニ於テ法會ヲ修セラル御名代毛利紀伊守毎日御詰萬見合毛利右近毛利佐渡御作善惣都合益田修理清水五郎左衛門

舊記錄ヲ閲スルニ大猷公靈牌ヲ氷上山ニ安置シ高百石寄附セラルヽコト慶安年中ナリ其後寛文元年九月十一日大猷院殿ノ靈牌ヲ氷上山眞光院ヘ安置ス頃ロ他藩ニテ此事イカニ處置ナリシヤ探索セラレケルニ新ニ社地宮殿ヲ設ケルモアリ又ハ古跡ノ寺院ヘ取添テ神殿ヲ造構シテ靈牌ヲ安置セラルヽ由ナレハ氷上山ハ古跡ノ靈地ト云殊ニ堂宇壯麗ナレハ是ヘ牌殿ヲ設ケテ靈牌ヲ崇祀セラレタリ此靈牌供養料寄附ノ事別ニ一件ノ記錄アリ後ニ掲載スベシ

三月朔日御手回組頭繁澤二郎兵衛就充兒玉三郎右衛門元誠ト交代三日就充江戸出發歸國セリ

二十六日御國目付石川彌左衛門石丸石見守萩ニ抵ル

兩人萩着三日目ニ老臣謁見且郊迎等齋藤山田派遣ノトキト大差ナキモノヽ如シ

慶安承應國御目附記承應二年兩御目附石川彌左衛門及石丸石見守及二月二十三日江戸御立三月十二日御乘船十九日上關二十三日三田尻二十四日山口二十五日萩御着六月朔日天守要害ヘ御上リ洞春寺ニテ御料理此時妙玖寺迄之かけ道損候間公儀被仰伺候處妙玖寺脇之矢倉之儀をも被仰付御尤之由被仰出可然之段被仰候

五月十八日川上蓋御見物川網御引せ國司備後屋敷ニテ御料理以下略

二十八日萩城ニ於テ兩使ヲ饗應セラル

四月三日毛利日向守參府登營裕十ヲ給フ

四日毛利和泉守參府登營金馬代綿百把ヲ給フ

二十一日公列侯ト同ク登營日光ニ於テ大猷公三年忌法會滿散ヲ祝ス

五月朔日大城ニ於テ能舞アリ公家衆日光法會ノ爲京都ヨリ下向セシモノカ及列侯ヲシテ之ヲ觀セシム公亦登營

二日福島勘左衛門就親曩ニ江戸ニ於テ病死ス實子ナシ知行沒收セラル母子ヘ堪忍料給リシカ就親公幼年ノ時ヨリ傅役勤務セシヲ以テ親族杉山太兵衛弟八郎兵衛ヲ養子ニ許可シ母ヘ給ハル堪忍料扶持方切米ニ直シ公役怠ル無ラシム三浦壹岐守元定跡職養子ノ申請セシモ允許以前病死ス毛利宮內弟權兵衛就正ヘ元定之相續ヲ允シ知行四百石之內百六十石ヲ賜ヒ公役ヲ奉セシム

五日公日光山參社トシテ松平出羽守ト同シク江戸ヲ發シ八日登山拜禮十一日歸府

是時列侯皆參社道路雜沓セルヲ以テ公從衛ヲ減シ輕隊二百人ヲ率ヒラル東照宮ヘ雄劍一腰龍蹄匹代銀五枚大猷公ヘ香奠銀三十枚納メラル

十七日公正殿ニ移居仰表ト稱ス龍昌大夫人及姫君來リ賀ス膳具ヲ饗セラル

同日椙杜兵庫頭就幸ヘ家祿二千石ヲ加ヘ賜フ原額ヘ加ヘ二千八百四十石ヲ領セシム

按ニ就幸ハ志道紀伊守元幸養子ニテ始メハ志道ヲ稱シケレドモ後ニ君意ヲ奉シ或說ニ松平出羽守直政嫌忌ノ性アリテ志ト死ト音訓ノ同シキヲ以テ公ヘ請フテ改稱ヲ命セラレシト實方椙杜下總守元縣次男ナリノ氏椙杜ヲ稱ス寛永二十年ヨリ綱廣公御部屋老役ヲ勤仕シ晝夜輔導ノ力ヲ盡シ超群ノ功アルヲ以テ今回ノ恩命アリシナリ

二十日大猷公法會結願ニ因リ諸國在監人赦罪ノ台命アリ我藩ニテ出獄ヲ宥スモノ男女拾七人本年二月氷上山ニ於テ法會ノトキ赦罪出獄セシモノ男六人

二十九日閣老福間彥右衛門ヲ召シ我中屋敷ハ增上寺ニ接近ス其近傍火ヲ失スルトキハ公增上寺ヘ出馬シ火防ヲ爲スヘキノ召命ヲ傳フ

同日實六月朔日長府宰相秀元室松平因幡守康元女日下久保邸ニ於テ卒ス

日不詳江戸組頭兩人山內治部少輔元資柳澤監物佐元辰被差上最前之六組ニ江戸兩組被加遠近ヲ以テ江戸ヘ被召上自今六組ヲ八組ト爲ス

六月二日江戸老臣公旨ヲ承ケ國許老臣國司備後守ヘ報告ノ事項アリ其要領ハ財政

ニ關スルモノヲ第一トシ備後堅田安房ト地當職交替ニ付テノ條件ヲ列擧セシモノナリ其文左ノ如シ

按ニ堅田國司ノ交任ハ昨年七月ニ在リ無盡集ハ本年ノ部ニ編入セリ原文ノ事實ヲ推測スルニ昨年ニハアラサルカ判定シカタシ尚後考ヲ竢ツ

國司備後守え御口上之覺

一御所帶御續之儀何とそ沙汰仕見可申通各へ被仰渡春以來僉儀候へ共御先代以來度々御改之儀に候へは唯今何之かどにも過分に出目無之候少々有之とても一萬貫目に及たる御借銀年々利上ケ被仰付候へは引たり申儀にて無之候於于今は何とそ御借銀年々御調之儀銀主〳〵え理之道も可有之哉に候其趣は宮內少輔殿御存之儀に候各も御聞屆思召寄可被仰聞候御借銀之さき〳〵於江戸は御旗本衆なとも有之候京大坂之借銀も根本いつれ之仁も不知事候左候からは此理被仰出候處大事に存候扨又此儀被仰出候てはもはや御借銀の手きれに相成事に候左候時は御內證江戸御國迄御遣方引合極る上御儀定肝要に候右之引合出來次第追て可申入候事

一國司備後守成至極其上數ケ年御役目所勤故相草臥申之通に付て右之御役堅田安房守え被仰付候彼方も大事之御役目第一不仕付御請仕候萬事御留主居衆被申合此段之御用首尾仕候樣にと

御親子樣被思召候此段毛利右京益田越中守え念比に可被仰渡之旨候事

一御一門中福原隱岐與頭中いつれへも右之通被仰渡候樣にと被仰出候事

一益田無庵え被成御意候は安房守御用に付て限有儀は可令相談候被仰聞迄も無之候へ共左樣之節は無用捨存寄被申候樣にと被仰出候事

一國司備後え之御意成至極仕以之外相草臥申之由度々御理無余儀被思召堅田安房守え被指替候安房守事も不仕付御役目之儀候條萬事無案內たるへく候限有之儀は備後え令談合可相調之旨被仰付候何篇無用捨相談候樣にと重疊被仰出候事

一御所帶御續之引合被仰付候いつれ之道にも御沙汰成苦敷儀候左候からは御家

來衆御役目等之時も御心付或は借銀にても被仰付儀此節は被爲成間敷候然時は内々身持ついえ無之樣にと被思召候此段御一門中與頭中えとくと被仰渡連々御家來衆奉得其意候樣にと被仰出候事

一大目付役一人被仰付候此儀美濃守殿へも被申達無余儀との儀に候は則可被仰渡事

一堅田安房守先祖被成御預ケ候人から是又美濃守殿えも被申達候之上被仰渡事

一國司備後守成至極仕候付て彼者役儀堅田安房守え申付候尤限有之儀は備後守茂令相談諸沙汰仕候樣に申聞候通御目付衆御兩所様え殿樣より之御口上之事

一福原左近毛利右近兄弟緣邊之儀被遂御分別候此段御目付衆え御尋之事

一益田無庵娘緣邊之事一旦無庵え内談被申候其上彼方被申次第御目付衆え御尋之事

一毋衣御使番御鑓大將弓鐵炮之頭其外ヶ樣之御役目被仰付候人から與頭中え御内談の事一組より五人にても七人にても或は二人三人にても被書出爰元可被指越候其上之儀は於此地被成御僉議可被仰付候御家來衆多分若代に相成聢々人から不被成御存候付御尋之事

一證人衆御心付之儀御差引被仰付候各一人宛被指出仕立旁過分之造作たるへく候

殿樣御所帶被爲成儀候は如何樣にも被仰付度事に候へ共此節之儀に候條御心付江戸定詰並之御扶持方可被仰付候番手之證人衆には並之御心付可被仰付候八百石宛之御役之儀は先年之ことく可被指除候事

一國司備後守御役堅田安房守え引渡八月朔日より安房守存之分に諸手子迄可被差替旨候事

一國司備後え被仰聞御口上之事

以上

六月二日

二十三日禁内火災因て尾越勝右衛門ヲ使トシ披露狀ヲ進献セラレ又書翰ヲ以テ燒

亡諸家ノ安否ヲ問ハル左ノ如シ

禁裏　仙洞　女院　新院　近衛殿　九條殿　德大寺大納言　飛鳥井大納言　勸修寺大納言　樋口中將　菊亭侍從　烏丸宰相

延燒ノ搢紳家ハ菊亭侍從日野大納言伏見院烏丸宰相堀川辨施藥院南光坊半井良庵ナリ續テ祖式久太郎ヲ使トシ禁裡ヘ毛氈百枚ヲ獻セラル（此回ノ火災仙洞女院新院共ニ恙ナシ）

閏六月十七日將軍病アリ公列侯ト同登營

二十一日吉川美濃守廣正嫡子左馬助廣嘉參府帷子三銀馬代ヲ賜フ

七月二日毛利和泉守光廣江戸久保町邸ニ卒ス（卅八歲）家從羽仁三左衛門正堯井上久右衛門重政殉死

三日將軍使ヲ以テ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ公登營拜謝如例

七日公登營將軍ノ病ヲ候問セラル

十六日毛利和泉守跡職ニツキ幕府ヘノ申請書相杜兵庫頭兒玉淡路守ヲシテ閣老ヘ提出セシム

十九日將軍使ヲ以テ龍昌大夫人ヘ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ拜謝例ノ如シ

二十一日御國目付石川彌左衛門石丸石見守萩ヲ發シ國內巡視八月八日萩ニ歸ル無盡集兩使巡回ノ時接待方及家中ヘ國老ヨリ奉文且八月五日暴風兩國內被害地ノ景況八月二十五日國老ヨリ兩使ヘ錄上ノ扣アリ其統計左ノ如シ

倒家壹萬千二百貳拾軒

死人百六人　手負百六拾四人

破損舟四百四拾七艘　死馬三拾七匹

手負馬貳匹　死牛貳百匹

手負牛四匹

牛馬屋倒數千四百三十六軒

倒鹽屋六百二十軒

右之外田畠被害所ハ急速調査シカタキヲ以テ報告セス（小箱舊記抄本年十月九日幕府ヘ報告異之ニ同シ兩國合計高六萬千八百七十七石九斗三升當物成損所トアリ）

同日公山内治部少輔ヲ長府ニ遣シ毛利和泉守ノ死ヲ弔シ老臣等ニ書ヲ贈リ管内政務ノ指揮九州筋公邊輸送遲滯無ラシム

二十二日幕府紅葉山之修營ニ因リ綠青五百斤献セラル

二十五日益田越中就宣毛利右京就賴替トシテ江戸着

同日妻木五郎右衛門正之跡職其子權之助正勝ニ佐々木勝左衛門光義跡職其子長藏義滿ニ勝山半左衛門正則跡職其子龜之助正治ニ命シ各其後ヲ繼カシム綿貫彌左衛門（實綿貫越後元重二男也）跡職隱居分ニツキ跡職ヲ命セス仲市左衛門就路多年ノ功勞ニ對シ高八十石ニ加祿セラレシモ分限帳ニ登錄ナシ現今要路ニ在勤セシヲ以テ原額ニ加ヘ百六十石トナシ分限帳ニ加入セラル

八月朔日公登營將軍謁見獻物如例

二日禁内炎上ニ付類火ニ罹リシ公家ヘ銀子ヲ贈ラル三百枚宛菊亭少將日野中納言烏丸宰相二百枚宛裏松辨施藥院驢庵

四日吉川左馬助改名監物依長松君爲左馬頭也（家光公第四子甲府宰相）

八日將軍病アリ公登營

十二日勅使下向將軍叙從一位任右大臣ノ宣旨ヲ賜フ右大將如元公列侯ト同登營之ヲ祝ス

十三日益田越中守閣老邸ニ至リ老臣連判ノ誓紙ニ血判ス

十六日大城ニ於テ祝能ヲ催シ下向ノ公卿ヲシテ之ヲ觀セシム公大折一個ヲ献セル能舞終ル後公列侯ト皆登營

二十二日去五日國内大風雨萩城其他破壞ノ公報到ル之ヲ閣老ニ報告ス

二十三日御國目付石川彌左衛門石丸石見守萩城ニ於テ饗セラル二十六日兩使萩ヲ發ス

無盡集御國中石高附立兩使ヘ示ス扣アリ左ノ如シ

御國中之石高附立

一拾六萬四千四百二十石　周防

一拾三萬四千六拾石　長門

御米印辻但古帳

合貳拾九萬八千四百八拾石

内

三萬六千貳百石　甲斐守

三萬石　美濃守

以上

一貳拾九萬六千四拾石

一貳拾四萬三千貳百四拾六石　周防

三井撿地　長門

合五拾三萬九千貳百八拾六石

内

五萬八千拾貳石　甲斐守

四萬五千石　美濃守

三萬石　日向守

以上

一貳拾萬貳千七百八拾七石六斗　周防

一拾六萬六千六百二十三石四斗　長門

合三拾六萬九千四百拾壹石

内

四萬七千三百四拾九石　甲斐守

三萬七千百貳拾九石　美濃守

貳萬五百五拾石　日向守

以上

一三拾七萬千七百九拾八石　周防

一貳拾八萬四千五百五拾石　長門

熊野藤兵衛ならし帳

合六拾五萬六千三百四拾八石

内

八萬三千拾壹石　甲斐守

六萬壹石　美濃守

四萬拾石　日向守

以上

御目附衆へ付出ス石高附立

一高六拾五萬六千三百四拾八石

内撿之辻

内

拾五萬三千百壹石九斗

藏入

五拾萬三千貳百四拾六石壹斗

家中配但扶持切米ニ而遣米知行高ニ直ス共ニ

内

此ヶ條ハ附紙ニテ書付有之

四拾五萬三千六百八拾四石　地方

四萬九千五百六拾貳石壹斗

無給扶持方切米ニ而遣米知行高ニ直ス分

御上使へ指出候ニハ此附紙ノ分ハ書付不申候

一高六拾七萬七千八石

此節之御内撿高

内

貳萬六百六拾石

是ハ先年益牛庵存之時諸郡給領否戻り貳石幷寛永三年以來諸郡開作又近年御藏入地下ならしあかり之出石ニ付而熊野藤兵衛究高ヨリ增申合

殘六拾萬六千三百四拾八石

熊野藤兵衛究帳之前

以上

大記錄卷七八月十七日石川彌左衛門石丸石見守江戸ヨリ派遣半年在萩ニツキ銘々分限高ノ御合力米半年分金銀ニシテ附與セラレ兩人ヨリ收領證アリ其員數左ノ如シ

一高貳千石　右之物成　四百石定　但四ツ成ニシテ

銀ニシテ

拾五貫三百八拾四匁六分壹厘

但銀百目ニ付貳石六斗宛ニシテ

石ニ付三十八匁四分六厘壹毛五朱之内

石川彌左衛門

一高千貳百四十八石貳斗三升四合

右之物成四ツ成ヲ半物成ニシテ

貳百四拾九石六斗四升六合八勺但四ツ成ニシテ半年分

銀ニシテ

九貫六百壹匁八分

但銀百目ニ付貳石六斗宛ニシテ

石別三拾八匁四分六厘一毛五朱

右之銀金子ニ直シ

小判百四十六兩與銀貳匁三分

但小判壹兩ニ付六拾五匁七分五厘替ニシテ

石丸石見守

二十八日公無官之列侯ト同ク登營任官ヲ祝シ太刀馬代金壹枚ヲ献セラル

九月朔日公登營將軍任官ノ祝能ヲ覩ル閣老ヨリ陪覩ノ傳達アルニ依レリ

四日將軍、重陽ノ與服ヲ献セラル如例

九日公登營謁見

十日新山肥前守元村其子五郎左衛門就村孫勘右衛門就政へ家祿五百石之内三百石ヲ就政へ二百石ヲ就村へ分與セント請フ

公之ヲ允シ元村へ隱居ヲ命セラレ就政ハ元村ノ家ヲ繼キ就村ハ別家トナル林權右衛門元之多年京都留守居役勤務セシカ嫡子山三郎へ賜リタル扶持方切餞ヲ高ニ直シ五拾石トシ元之ニ賜フ井上七郎左衛門元之累年ノ勤務ニ對シ高五十石ヲ賜リ本知へ加へ高百四石ノ諸役目ヲ命セラル

同日御鷹師湯淺清兵衛罪過アリ親妻子共國退ヲ命ス

十一日福原隱岐守元俊八月九日死去ノ報至ル爰ニ證人トシテ在府セシヲ以テ證人奉行へ報告ス

同日毛利右京進ハ江戸ヲ發ス

萬記錄右京進歸國ノトキ奉命ノ條書アリ茲ニ抄錄ス

一弓鐵砲之頭其外御役かけめ或ハ老足或ハ病者ニ付御役難勤御斷申上もの被成御替候付立中略右之内御使番之儀御先代は拾二人被仰付候得共只今は八組有之に付一組二人宛可被加置ために十六人に被相定事

一御家來衆近年しのひ〳〵在鄉仕只今は大半田舍に住居在萩之者殘少にて其上於于時御用もかけ面々屋敷廻りもあらし旁不可然に付癸巳ノ年ヨリひつしのとし迄三年之間萩可罷出之通被仰出候事

付り八十石持より已下之者は在鄉仕勝手相成子細有之は與頭聞屆老中へ申理上出萩可被指免との事

付り自今以後は少身たりと云とも與頭へ相理江戸相伺候はゝいか樣とも可被仰出との事

付り萩ヨリ一里の外は在鄉同前之儀候間出萩可被申付との事

同日德地代官能美仁兵衛破廉耻ノ所行アリ附屬神田傳右衛門審問ノトキ仁兵衛ノ違法ヲ申告セシモ宥免セラレス扶持方沒收高橋六兵衛ハ仁兵衛謀書傳右衛門ヘ依賴ノトキ同席シタルヲ以テ一命ヲ助ケ國退ヲ命セス

二十二日將軍國產ノ白炭一箱并干肴一種献セラル

二十四日御國目付石丸石見守着府

二十八日琉球使登營繼統ヲ賀ス公登城ニ及ハサルノ旨閣老ヨリ傳達アリ

十月三日將軍ヘ國許所獲ノ初鶴ヲ献セラル

五日御國目付石川彌左衛門歸府

十二日稻葉美濃守本多能登守永井右近ヨリ毛利和泉守光廣遺領嫡男右京ヘ（後甲斐守綱元）

（于時四歲）賜ルノ台命ヲ傳フ

御家譜年表右京家督ヲ繼ノ時命ヲ以テ豐東郡（今豐浦）之內一萬石ヲ刑部少輔元知ニ

分知ス寛明日記毛利和泉守跡目五萬石ノ內四萬石ハ息右京一萬石ハ和泉守弟刑

部ニ被下トアリ

同日大城ヘ松平出羽守ヲ召シ閣老ヨリ毛利右京ヘ家督ヲ命セラレタルヲ以テ之ヲ

千代熊ニ達スヘキノ旨ヲ傳フ

按ニ松平出羽守ヘ傳命アリシハ先年甲斐守秀元卒去嫡子和泉守ヘ家督ノ幕命ア

リ秀就公意ラク長防一圓宗家ノ所領ナレハ末家々督ノコト總テ宗藩ニ命セラレ

宗藩ヨリ支藩ニ報告スヘシ今直ニ和泉守ニ命セラルヽハ如何書ヲ以テ之ヲ閣老

ニ議セラレ又今回和泉守跡職ノ申請書ヲ提出セシ等ノ結果ナルヘシ

十八日將軍重陽ノ內書ヲ賜フ

日不詳福原源三郎十六歲之時（後左近）父隱岐守元俊死去依兄式部就俊早世幕府ヘ申請

十月暇ヲ賜ル翌三年二月二十四日歸國（柿並年表長陽年代記所見福原系譜寛永十九年五歲時爲父元俊謁人至承應三年在江戸）

十一月朔日毛利右京網元家督拜謝幼少タルニ因リ使者ヲ以テ太刀馬代金二十枚綿

二百把ヲ献ス家老細川宮內椙杜下總將軍ヘ謁見和泉守遺物トシテ刀一腰（大和包永）ヲ献

ス是刀ハ白樫ト名ツク家ノ名器ナリト云（寛明日記毛利刑部ヨリ獻目御禮五枚トアリ）

十一日將軍ヘ羽織三串海鼠一箱献セラル

十二月三日寶樹院一周忌上野法會滿會ニ付公登營

四日阿曾沼石見守元理病中養子忠二郎秀光ヘ跡職ヲ命シ采地ヲ領セシム（知行高二千五百石）

十一日（大記錄相府年表十二月十二日トアリ）公登營加首服（俗稱元服）將軍謁見アリ偏諱（綱）并ニ脇指（貞宗無銘）ヲ賜

フ從四位下侍從ニ叙シ千代熊丸ヲ改テ大膳大夫綱廣ト稱ス（時年十五）引續御禮トシテ拜謁シ眞御太刀（來國光）馬代銀子三百枚小袖二十ヲ献セラル（林道春御字ノ反切ナリ廣ノ字ナリ上ルル）

此日公ト同ク首服叙任ノ人三名公及ヒ上杉播磨守（幼名喜平次）細川越中守（幼名六丸）ナリ座列ハ一ニ公二ニ播磨守三ニ越中守ナリ此時公ノ進退ノ詳雅ナル式禮ニ慣熟シ玉フコト舉テ稱セシ程ノ事ナリシ（御一代記江戸來老ノ書ニ見ヘタリ）

是日公大城歸途大老閣老ヲ回訪シ且贈ルニ小袖太刀馬代樽等ヲ以テス

十三日公登營將軍ノ病ヲ候問セラル

二十二日京都ヘ口宣拜受ノ使者（閣老日ヲ京都所司代宛井公ヨリ板倉周防守其他ヘノ書輸持參）赤川十郎左衛門就政ヲ遣シ禁裏御所ヘ進献其他贈物左ノ如シ

諸大夫成ノ口宣位記ハ承應元年十二月二十七日之御日付ナリ口宣位記畧之

諸大夫成御官物

禁裏　黄金一枚（上鷹局）　長橋局ヘ　銀子一枚宛

仙洞　銀子三枚（御櫛笥局）　京極局ヘ　銀子一枚宛

新院　銀子三枚（上鷹局）　按察使局ヘ　銀子一枚宛

女院　銀子三枚（上鷹局）　右衛門局ヘ　銀子一枚宛

内侍所　銀子四十目（傳奏二人銀子六十目宛上卿ヘ銀子六十目職事ヘ同）

位記　銀子六十目　大内記

宣旨　銀子一枚　大外記

請印　銀子一枚　少納言

主鈴　銀子二十目

雑掌兩人銀子二十目宛　太刀代銀子五文目

四位侍從成口宣位記ハ承應二年十二月十一日ノ御日付ナリ口宣位記畧之

侍從成官物

禁裡（御太刀折紙銀付臺有）　銀子十五枚

官錢貳百貫文（禁内四處ノ宮女ヘ分配）

仙洞　同貳百貫文　銀子三十枚

新院　同　　同前
女院　同　　同前
内侍所御太刀　　銀子二枚
雨傳奏　　銀子五枚宛
上卿　　銀子六十目
職事　　銀子同前
位記五條大内記　　銀子五枚
請印少納言　　銀子六十目
主鈴内豎　　銀子一枚
副使　　銀子二十目
雑掌二人　　銀子四拾目宛
御太刀代　　銀子五文目
御冠懸緒ノ御禮

禁裡　銀子五枚　仙洞　銀子三枚
新院　銀三枚　女院　銀子三枚
飛鳥井　銀三枚　飛鳥井雑掌銀子一枚
此時公首服ノ御祝トシテ家臣中ヨリ使者或ハ脚夫ヲ以テ献物アリ領内人民ヨリモ一郡限ニテ肴一種酒一樽宛ヲ献ス
二十八日井上忠兵衛就貞死ス養子半右衛門就貞ヘ跡職ヲ命シ采地ヲ領セシム知行高三百石
竹田宗南六月二十二日病死ス養子出願許可以前ト雖モ請願日限遠隔スルヲ以テ養子宗知ヲシテ其後ヲ繼カシメ知行百三十石ヲ給ハル三戸甚左衛門清行養子出願江戸到達以前死亡ス此ハ末期ノ法ニ行ハレカタク又向後末期申請人ノ疑義ニ係ルヲ以テ知行三拾壹石ノ内拾壹石没收殘二十石ヲ養子甚兵衛清貞ニ給フ田邊八兵衛實子ナシ養子申請ノ理由前ニ同シ知行八十石之内三十石没收殘五十石ヲ養子權三郎ニ賜フ原田甚右門就勝綱廣公幼年ヨリ勤務ノ勞ニ依リ扶持方切錢ノ外知行三十石加賜ス

以下他日淨錄ノトキ各月日ノ欄ニ編入スヘシ九月十五日公家諸御納戸銀諸臣ヘ貸與ニ關シ當職堅田安房ヨリ御銀子方中村五郎左衛門渡邊太兵衛ヘ授クル八ヶ條ノ方法定書アリ左ノ如シ

一借銀御定之當リ前の分能々沙汰被仕出無別條は其與頭判形之上貸可被申事

一御貸銀調之事は三月晦日を切に沙汰可被仕事

付右之日限迄不納之衆をは四月朔日に此方え可被書出候事

一面々分限ゟ當り前過借用の方前世ゟ數人有之由候分限不相應ニ過タル衆ハ俄ニ當リ前ニ相成リ候樣調候事相成間敷候條壹貫目ニ付元之內百目充利銀ニ相添整可被申付候事

付過銀面々分限ニ大方可被調切程之趣ニ候ハ其年取切樣ニ沙汰可被仕候事

一小身衆之分ハ當リ前之外之銀子百目ニ付元之內五匁宛利銀ニ相添上納可被申付事

一其身相果跡職立不被遣者之儀ハ前世之如被仰付今以無相違候間御藏銀ヲ以調可被仰付事

付請人有之而貸被申タル銀子之事ハ其節之約束次第タトヒ本人相果候歟或ハ損仕事有之共請人ゟ調可被申付事

以上

右付書トモニ八ヶ條之辻ヲ以テ沙汰可被仕候公借之分ハ作間藤左衛門方ニ付出有之儀候ハ內々彼方エ被相談双方無相違樣ニ可被相心得候以上

承應貳
九月十五日

堅安房

中村五郎左衛門殿
渡邊太兵衛殿

右堅房州書出付書共八ヶ條拙者再見申モ今以無別條候間此辻ヲ以沙汰可被仕候以上

明暦三年
十一月十三日

井上三右衛門殿御貸銀方
野原九郎右衛門殿御納戸銀方
十一月十三日堅田安房當職在勤中諸郡へ六人派出ノトキ授ケシ覺書アリ左ノ如シ
但六人ノ名前ハ見エス

覺

一在々彌延米小百姓等儀別イカホト調申候哉之事
付庄屋エ相尋聞候事
付畔頭面々エ相尋聞候事
付小百姓窄人ハ寺社家エ可被相尋事
一代官衆え去年之彌延米算用郡奉行中迄可被差出事
一代官衆才判所え何幾日に罷越在々之申付如何樣に有之哉之事
一代官手子いか樣に有之哉之事
付庄屋百姓所にて酒飯等賜哉之事
一代官手子庄屋畔頭百姓等返り振舞或は悅事に付而寄相料理之献立其外作法之事
一庄屋畔頭地下人遣之事
付庄屋所ニハ不斷百姓兩人相詰候樣風聞候事實候哉イカヽ之事
付畔頭所ニ壹人相詰之由風聞候事
一地下普請其外人力小遣如何樣ニ申付候哉ノ事
付公儀ゟ之扶持方勘渡之仕樣之事
付無飯米ニテ地下人仕役之事
一當秋之風雨ニ付而地下之痛高下村々エ替可有之候各々及見候處書付可被罷歸事
一在々竹木採用イカ樣ニ仕候哉之事
一竹木御立山ニ可相成所ヲ不立有之哉之事
一御家來衆在郷ニテ作法之事

一庄屋畔頭御役所勤仕様之事
一其村に訴人可出様成人柄之ものには庄屋年寄爲私諸役指免其前を百姓かつきに申付通風聞候此段いかゝ有之哉事
一庄屋組頭小百姓に至迄面々の作免んと其身所帶見合之事
付外之商仕哉之事
一村境或御藏入給領境目に隱地有之様風聞候事
一撿見之時替地仕様に風聞候此段いかゝ有之哉之事
一一ほのきの内に庄屋年寄之田地は石輙小百姓之作り地は石高之由風聞候事
一御家來衆於于時爲遊山在郷被參候時庄屋年寄爲馳走人力差出之由風聞候事
付飯米賃銀いかゝ之事
一地方浦方共に先年熊野藤兵衛五ッ成抨之時捨石有之由候いつれの村にいかほど有之哉捨石如何様に仕哉之事
一村々庄屋年寄小百姓痛之程見合之事

一麥作之仕付いかほと仕哉之事
一荒おこし仕哉之事
一當風雨に付て品物痛之程之事
一村々近年百姓分散之次第之事
一地下脇借仕様之事
付御藏納より先え脇借拂候哉事
付庄屋口入に先え引取候哉之事
一利安之脇借を不開入庄屋年寄自分に開立高利之米銀口入候様に風聞之事
一上使御國廻賄物在々え懸候次第之事
一御家來衆開作に地下迷惑仕所又古田之水を新田え取古田痛候哉之事
一在々道橋取繕之事
一御用木盜切候事
付竹同斷之事

一大鳥を取其外御法度ものを脇え出候事
一今度之風雨高潮に付て村々破損所見及之事
一きりしたん宗門自然有之哉之事
一天下送并御國中村送り無緩樣に內々申付有之哉之事
一旅人え宿貸申儀いかゝ有之哉之事
一代官手子并庄屋畔頭之內別て御公儀惜を入候者有之は可被聞立事
一其村無作法之次第訴人候は褒美可遣事
付小百姓にも抽無緩覺悟之者候はゝ是又何之村々何かし書立可被罷歸候事
右在々念を入可被及見候又聞立之儀は庄屋申分或畔頭地下年寄又小百姓等に被相尋申分於相違は可成程被聞立可被罷歸候究之事は此方にて承上沙汰可申候間先稿に被立聞候事專用候以上

承應貳癸巳年
十一月十三日

右郡中え六人衆被差出候時誓紙被仰付と相見候案書扣記之

起請文前書之事

一私事今度郡中爲御用被指出候御覺書其外御口上にて被仰渡候旨奉得其意諸傍輩中并諸手子又庄屋浦年寄畔頭小百姓に至迄其品々に善惡之儀毛頭つゝしみなく可申上事
付自然請取之在々に遠類は或別て申合者之儀は不及申縱親子兄弟緣者之儀に候共少も不殘其品可申上事
一被仰渡之外之儀たり共善惡に付而御爲に可相成儀隨分承立可罷戻事
一於郡中少も在々之造佐に罷成間敷事
付酒肴野菜菓子等に至迄相當之直段買扣に付置罷戻上於御尋は可懸御目事
付旅宿之外にて湯茶たはこ之外給申間敷事
一於郡中少しの物たり共禮儀禮物請申間敷候勿論此方ゟ茂遣申間敷事
付朝夕給物之外何にて茂買取申間敷事

一私廻り候在々之外余仁之參候在々之儀候共隨分承可申上事
一今度私同前の御役にて數人郡中被差出候先樣にて之御役所勤之樣子又罷戻候て請取之在々之趣に付而申上候儀他人の儀は不及申各中間え茂他言仕間敷候勿論被仰付之外之仁えは縱親子兄弟共外諸親類近付たり共他言又書立物他見仕間敷事
但是ゟ爵文に相成候哉右之通に書留有之

承應二三年長防御兩國御藏入給領物成付立上勘所ヨリ提出書立左ノ如シ

防長御兩國承應二年給領物成當り

一惣高ニ三ッ七歩七朱四味七拂
右畠を石貫五ッ成ニ〆　延口米を懸ケ右之當

承應三年給領物成當

一惣高ニ四ッ六歩三朱五味八拂
右畠を石貫五ッ成ニ〆　延口米を懸ケ右之あたり

右正保三年御改より如斯御定此當りを以御浮米取兼え被遣來候事

二月朔日

承應三年分御藏入物成當り付立

一吉敷郡　櫻井市之允
田惣高に三ッ五歩三朱七拂
一同郡　東條九郎右衛門
田方惣高に三ッ四歩一朱一味四拂
一佐波郡　長沼太郎兵衛
四ッ五歩二朱八味六拂
一同郡　渡邊五兵衛
四ッ三歩七朱六味一拂
一同郡　吉原九郎右衛門
三ッ二歩ニ當ル

一同郡　野村九右衛門
三ッ七歩九朱一味
一熊毛郡　神保市郎右衛門
四ッ一歩八朱六味五拂
一同郡　上田八郎右衛門
三ッ二歩八朱三味四拂
一同郡　河野市郎兵衛
三ッ七歩一朱四味六拂
一玖珂熊毛郡　見島九郎右衛門
四ッ三歩七朱六味五拂
一都濃郡　吉原傳左衛門
四ッ九歩二朱五味三拂
一同郡　尾川三郎右衛門
四ッ六歩一朱三味二拂
一上之關　平岡八左衛門
一ッ八歩二朱一味三拂
一大島郡　山縣善右衛門
三ッ三歩七朱五味四拂
一同郡　粟屋五郎兵衛
四ッ四朱二味一拂
一阿武郡　坂井喜左衛門
三ッ九歩四朱五味九拂ニ當ル
一同郡　村田嘉兵衛
四ッ三歩一朱三味ニ當ル
一同郡　尾本八郎兵衛
四ッ六歩三朱六味三拂
南清右衛門

一同郡　村上七兵衛
一ッ七歩九朱八味一拂
一大津郡　八木又兵衛
三ッ貳歩貳朱貳味九拂
一同郡　長屋又右衛門
三ッ六歩九朱壹味九拂
一大津豐田郡　國司喜兵衛
三ッ四歩五朱三拂
一厚狹郡　厚母市郎左衛門
三ッ九歩九朱九味九拂
一厚東郡　坂七右衛門
三ッ九歩九朱
一同郡　竹内少兵衛
三ッ壹歩六朱八味三拂
一美禰郡　井上右衛門允
三ッ三歩七朱七味
一同郡　一來七郎左衛門
三ッ七歩四朱貳味四拂
一山代　市川九郎右衛門
三ッ九歩五朱八味
惣田方高二十貳萬八千八百拾五石六斗三升七合
三ッ八歩三朱五味七拂
以上
右御所務代中一才判切物成當り如此御座候以上
二月朔日　岡本權兵衛
三浦七兵衛殿

三井又左衛門尉

按ニ兩人ハ慶元兩人役岡本權兵衛ハ御慶元御内勘方ナリ

承應三年甲午正月元日公江戸ニ在リ歳首ノ儀式ヲ行フ例ノ如シ

二日公裝束登營將軍ニ謁シ太刀馬代ヲ献セラレ將軍ヨリ呉服一重ヲ賜フ如例

六日黒澤丹宮ニ乘輿ヲ免ス

十二日將軍鷹捉ノ雁ヲ賜フ

十三日閣老諸藩公用人ヲ召シ先是幕府深ク切支丹宗教ヲ制止ス目今御代替ニツキ彌一般禁令ヲ勵行スヘシ因テ訴人ノ賞金ヲ改正セラレタルヲ傳ヘ制令ヲ頒布セリ

此時先規ノ如ク幕令ニ國守ノ添札ヲ爲シ高札ヲ改造ス

うつし

きりしたん宗門之事累年御制禁たりといへども御代替ニつき彌以斷絶なく急度可相改めの旨所被仰出也自然不審なるもの有之は可申出之此以前は伴天連の訴人に銀貳百枚いるまんに同百枚雖被下之自今以後は伴天連に同三百枚いるまんに貳百枚同宿其外宗旨之族は或は五十枚或は三十枚御褒美として可被下之若かくし置地所よりあらはるゝにをひては其五人組まで可行曲事者也

承應二年十一月日

大記錄卷十五承應三年甲午正月天下御代替ニ付而きりしたん宗門御制札立替之事於江戸被仰渡御國中御沙汰之事

但此時長府え如前に新御札整被遣候處請取不申被差戻候付而段々御沙汰之事扨又萩長府本屋敷可被差上哉との儀ニ付江戸へ此趣被仰上せ候事德山之儀も同斷之事

岩國へも新札爲持被遣候處前々之通立替相成候事

參考大記錄卷十五承應三年二月十三日萩唐樋御高札立樣繪圖記之

諸國在々田畠不荒樣にとの御札

新錢鑄申事之御制札

貴利支旦訴人へ御褒美の新御札

異國舟之儀ニ付而從御老中樣御ヶ條之御札

御添札

銀子百枚かゝり申候札

駄賃宿賃定之札

晦日阿川九郎左衛門江戸御到來方在勤中會計上過不足アリ扶持方沒收國退ヲ命ス

二月三日公板本遠江守ニ歸國ヲ命シ長崎ヘ唐船着岸ノトキ人數派遣及切支丹宗門老臣江戸在勤等ニ關シ吉川美濃守廣正及ヒ國元老臣幷一門中ヘ命令書ヲ授ケラル其文左ノ如シ

吉川美濃守ヘ御書

一筆令申候於國元諸事老共難斗儀有之ハ指圖賴入之通內々申達といへとも就中我等入國迄之間自然長崎表唐船着岸又隣國に不慮之事出來候て人數指出御馳走申儀候はゝ其人から幷人數多少御方父子校丁次第に候尤御手前被罷出ほどの儀候はゝ不及申先樣にても指引是又無用捨被申付可驗候御目付衆在國中別て肝要に候間兼々其御心遣可爲滿足候猶板本遠江相含口上候恐々謹言

正月晦日

吉川美濃守殿

尙々此段廣純へも爰元にをいて申達候

覺

一きりしたん宗門之事累年御制禁候へとも御代替彌爲可被相究訴人ほうひ銀改被仰出猶以諸國ともに究懈怠有間敷候通被仰渡候然は國中之儀先年五人組之神文指出といへとも大半組相かけめ可有之候條今度相改申付度候此段いかゝ可有之哉令内談其究可申付候通老ともへ申聞候事

一毛利宮内少輔毛利右京進益田越中守三人江戸番手に相定一とをり宛相勤候然といへとも打つゝき江戸詰太儀に可有之候間自今以後は殘一門之族相加勤番申付候はゝ諸事之樣子をも存かたく可然候條今年越中守爲替毛利佐渡守可罷上之通申聞候事右留守居之老とも可令内談候はゝ無用捨可有御指圖候委板本遠江相含口上候以上

正月晦日　御書判　但繼手御黒印

廣　正

○御留守居老中え被遣御書出三ヶ條

條々

一長崎表唐船着岸又は隣國に自然不慮之事出來候て人數指出御馳走申節は其人から并人數多少之指圖入國迄之間は吉川廣正父子可有校了尤彼方被罷出ほとの儀にをひては先樣にても無用捨指引賴入之通今度板本遠江を以申入候條各も得其意與頭寄組之者共可申渡候一門中之者へは別て申聞候若到其節否之族有之は急度可遂注進事

一きりしたん宗門究之事依御制禁累年相究といへとも天下御代替彌以手堅申付尤に候條國中侍町人百姓等に至迄如先年五人組之神文相改可然候此段廣正へ申入候間可令内談候事

一毛利宮内少輔毛利右京進益田越中三人江戸番手に相定一とをり宛相勤候然といへとも自今以後は殘一門之輩相加一人宛勤番可申付候條此旨申渡今年越中守爲替先毛利佐渡守可罷上候其以後之儀は追て可申遣候事

右之條々委敷板本遠江守相含口上候間可申聞候以上

正月晦日　御書判　但繼手御黒印

毛利宮内少輔殿
毛利右京進殿
國司備後守殿
堅田安房守殿

○御一門中へ御書折紙

一筆申候長崎表唐船着岸又は隣國自然不慮之事出來候て人數指出候はゝ其人から幷人數之多少かた〳〵指圖之儀入國迄之間は吉川廣正父子可有校了之通申入候條各も左樣被相心得無否可被遂其節候猶榎本遠江相含口上候恐々謹言

正月晦日

宍戸雅楽殿
毛利右京進殿
毛利紀伊守殿
毛利佐渡守殿

一筆申候江戸番手之儀毛利宮内少毛利右京進益田越中守三人相定一通勤番候然といへとも今より以後は各相加一人宛替に申付候條乍太儀内々被得其意今年越中爲替佐渡守可被罷上候委榎本遠江相含口上候恐々謹言

正月晦日

御判

宍戸雅楽殿
毛利右京進殿
毛利佐渡守殿
毛利紀伊守殿

○御家賴小身衆之内隱居惣領之セカレ寺社佛詣湯治幷末子二男三男諸藝稽古之ため他國へ御暇之儀時々江戸へ可被申伺との事

○大小身共にゐんきよ之御理江戸より被仰遣候へとも此以後は御入國之上人から被及御覽次第可被仰出との事

○江戸番手之衆小もの中間に走もの多し御中間なとも跡々は走申もの多し然と

も請人又親兄弟への御かまひ無之故猥かはしく罷成候間自今以後は直々者は不及申又うちのものにても走もの有之は可申入候條請人可有穿鑿との事

○屋敷うり買今午のとしより來ひつしのとし迄兩年に指免との事

○きりしたん究五人組之書物判形筆元毛利宮内少毛利右京進兩人可相究との事

○今年御目付衆於御下は萩かけ舟候事

射手舟貳艘　關舟三艘

通　貳艘

此外跡々よりはま崎に御舟有之事候間右之員數可然との事

○北浦物見番船肥中向つく兩浦には貳艘宛其外は壹艘宛可被付置との事

○萩御城代阿曾沼石見守相果候付替被仰出迄之儀組頭申候月替に御城代役可被相勤との事

十一日開老松平伊豆守福間就辰ヲ召シ御國目付派遣ニッキ下問答辨ノ始末小箱舊記抄ニ詳載ス左ノ如シ

前條略

一伊豆殿御尋被成候ハ兩國ものなりは幾ッ成程にて候哉と被仰候彦右衛門申上候は五ッなりにて御座候内々如被聞召候予之歳之御朱印辻二十九萬石余にて御座候を本多佐渡殿え得御内意撿出仕三十六萬九千四百余に罷成只今之御朱印辻此石高にて御座候其後内ならし仕六十五萬石御座候此時物なり五ッに相定候然共藏入給領共に五ッ成は不仕候四ッ四五歩或は四ッ三ッ四五歩三ッなり仕候通申上候伊豆殿被仰候は國中之米札はいかほと仕候やと御尋候年により高下は御座候へ共大かたは百目に付四石四五斗五石も仕候去年は大風吹申候に付三石程仕之由申上候伊豆殿被仰候殊之外下直成儀に候爰元にて之惡敷札ほとにも當り不申候偖又大坂えは舟差上せ候へは幾日程日數掛り候哉と御尋候彦右衛門申上候は尤日和次第にては御座候へとも七日八日十日計には上着仕候日和惡敷候へは十四五日或二十日計にも船中滯申候左樣御座候付大坂へ米差上候得は加子飯米運賃旁大分之入目にて御座候通申上候伊豆殿被仰候

は國中物成之外別に浮所務は無之候哉と御尋候防長兩國は物成之外何にても
うき所務無御座候周防國山代と申所に紙をすき申候此所石高大形五萬石程御
座候其所より一年に銀七八百貫程所務仕候付此五萬石八ッ成程に相申候此外
何にてもうき所務無御座候通申上候事

十九日福原隱岐昨年八月九日病死ニ因リ嫡子左近跡職ヲ命シ左近替證人毛利宮内
少輔弟一郎兵衛ニ上府セシメ左近ハ歸國ヲ許サレント之ヲ幕府ニ請フ今允許アル
ヲ以テ毛利宮内少輔弟一郎兵衛ニ證人ヲ命ス

三月朔日大手三ッノ御門（俗總門ト稱ス）夜中出入切手詰ニ關シ當役中ヨリ御目付中ニ奉文
左ノ如シ

覺

一大手三ッ之御門夜中出入之儀從先年切手詰に被仰付面々ゟ御門番所ゟ合印判
差出證自分〳〵之手形を以被相通候然處に組〳〵人から入旨被仰付たるも有
之に付て通り手形引合に手間かゝり申之由候條合印判帳一組切に被相改今月
中に御門番所ゟ差出シ被證候へと組頭衆ゟ申觸候條被得其意來月朔日ゟ其辻
を以念を入相究出入可申付之通組之者え手堅可被申渡候事
付通り手形之儀此中之印判を替新儀之印判を付組付之衆は何かし組何かし
と書付可被申之通申觸候事

一御門え被差出證候面々印判帳調樣之儀旁え被向合候て可被取調出之通申觸候
條可被得其意候事

一夜中御門出入之者通り手形無持參申樣族又は手形有之共紛たる子細於有之は
御門番所にかけ留證早速樣子可申出候否申もの有之は依其品搦置候ても不苦
候此段組之者え可被申渡候自然究緩有之は御門番之者共可爲越度候事
右之辻を以夜中無緩相究御門出入可申付之通手形可被申渡候以上

承應三
三月朔日

堅安房
國備後

岡部半左衛門殿　毛右京
飯尾肥後殿　毛宮内
桂二郎右衛門殿
國司太郎左衛門殿
粟屋勘兵衛殿
藤井長右衛門殿

三日公登營上巳ノ佳節ヲ賀ス歸邸ノ後謁ヲ群臣ニ賜フ

七日毛利刑部少輔元知諸侯列ニ班シ以來表向謁見出營ヲ免サル（正保三年三月朔日始謁見家光將軍慶安元年承家光將軍命爲小性侍世子家綱慶安四年八月十六日叙從五位下任刑部少輔）

十二日益田越中守爲替毛利佐渡守參府慶安四年公幼年之内留守居三員交番一員宛江戸在勤スベキニ確定シ今年三員巡番結了以後一門相加交替スベキノ旨命令アルニ依テナリ

日不詳御鷹師服部七郎兵衛鷹遣トシテ松平出羽守鷹場ニ差遣セシニ附屬人ト爭鬪ニ及ヒ亂暴ノ行動アリ審問ノ末放逐シ國内江戸京大阪住居ヲ許サス

四月三日大城ヘ福間就辰ヲ召シ國御目付トシテ能勢小十郎水野藤右工門派遣セラルヘキ旨閣老ヨリ台命ヲ傳フ公登營拜謝又能勢小十郎水野藤右衛門ノ家ニ至リ太刀馬代給十ヲ贈ラル

十二日毛利日向守歸國暇給二十ヲ賜フ

十六日國内鐵砲制禁ノ村名左ノ如シ萬紀錄

一萩廻リ一三隅　一深川　一日置　一山口廻リヨリ小郡迄
一山口廻リヨリ長野迄　同所ヨリ仁保迄　一三田尻
一防府廻リヨリ大道岩淵陶下津令小郡迄
一秋穂　一白松　一厚東郡宇部
一うつらひはり御鷹場右同時被仰遣村付

一三隅　一高佐　一紫福　一山口廻リヨリ長野迄　一三田尻
一防府廻　一赤　一秋吉　一大田　一岩永　一河原
一大嶺　一伊佐
一川網御法度右同時ニ被仰遣所付
一玉井長福ノ舟渡ヨリ上　一松本口土原舟渡ヨリ上右鮎川共ニ御法度之事
一御城之堀　一南明寺ノ下ノ池
以上右網打申事停止ニ被仰付候
大記錄卷二御國中御鷹場幷鐵炮留國老ヨリ詳細ノ禁令奉文アリ略ス
十七日諸大名ニ令シ禁內造營ノ役ヲ課ス
二十三日五萬石以上ノ輩ニ一萬石銀一貫目ヲ課シテ大內築地構造ノ科ニ充ツ
五月朔日江戸御用方兒玉淡路守ノ辭任ヲ許シ相杜兵庫ニ命ス
二日福原左近替證人繁澤一郎兵衛始テ登城太刀目錄ヲ献ス閣老阿部豐後守謁見此時
一郎兵衛名字毛利ニ改稱セヲル

萬覺書ニ毛利一郎兵衛事福原左近替リとして證人に被召置候に付左近並ヲ以御扶持方三十人分御心付上下拾七人分定詰並ヲ以上日別壹匁八分下壹人日別六分宛被遣候事
三日宍戸丹波守萩城代ヲ命ス
五日公列侯ト同ク登營端午之祝三月三日ニ同シ
二十五日國御目付能勢小十郎水野藤右衛門江戸ヲ發シ六月十九日萩城着同年十二月二十一日萩ヲ發シ翌承應四年正月十七日歸府ナリ能勢小十郎ハ自分領地ヘ廻リ二十六日歸府又柿並年表ヲ考ルニ六月二十六日萩城ニテ饗應八月十七日城山ヘ上リ朝ハ洞春寺夕ハ瑞願寺ニテ之ヲ饗應ス十二月十三日猪ノ熊ニテ猪獵シ十五日萩城ニ於テ餞別ノ饗應アリ二十一日萩出發二十三日三田尻出港ナリ○德川實紀承應四年二月六日使番能勢小十郎賴隆小性組水野藤右衛門元吉長門國目付ハ歸ヲ命ストアリ
慶安承應御國目付記ニ上使水野殿なと御國廻御調萩御歸九月二十二日也御附梨羽刑部桂五郎左衛門ト載ス萩出發ノ時日ハ判然セザルモ國內巡視ハアリシナルヘシ
同日愛宕金剛院ヲ招キ二夜三日護摩ヲ修セラル二十七日護摩成就齋飯ヲ供ス公病

ニ依リ益田越中圓明院印佐等爾伴食ス

二十八日閑老ヨリ毛利紀伊守嫡孫六ヘ益田越中娘縁職ノ件允許ノ書ヲ傳フ

六月十四日洞春公正忌日ニツキ正源寺心行寺ヲ招キ雉子ノ間ニテ齋飯ヲ供ス公出テ杯酒ヲ賜リ雉子二宛ヲ賜フ兒玉淡路圓明院等爾伴食ス

十九日任官御祝トシテ閑老各家ヲ招カレタルモ辭シテ來ラス御一門並懇親ノ旗下其他三十名ヲ我邸ニ招キ之ヲ饗セラル

二十六日御官任御祝ノ爲メ龍昌大夫人其他ヲ饗セラル在邸諸臣ヘ膳具ヲ賜フ

二十九日將軍端午ノ内書ヲ賜フ

七月六日將軍鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ

七日公列侯ト同ク登營歸邸後七夕ノ祝例ノ如シ

二十八日毛利佐渡守元包益田越中就宣爲替着府（萬記錄毛利佐渡守八月中閑老ノ邸ニ到リ暫紙判形トアリ）日不詳七月隱元來渡。至興福寺。隱元名隆琦隱元其字也。明福州福清東林林氏子。明曆元年。如京師。假居攝州富田。十一月創建黃檗山萬福寺。

八月朔日公登營太刀馬代ヲ獻セラル（群臣日ヲ禮錄チ曷シ謁見等年首歲抄ノ如シ）

同日家中知行相續ノ件ニ關シ江戸及國元老臣ヘ黑印ノ令條ヲ授ク左ノ如シ

申聞條々

一嫡子各別に知行を遣父子共に召仕候もの之儀其親相果候時は父子知行之内多分を其子に遣少分之方にて可致上表事

付其親二男三男有之時は依斷之品少分之地を讓遣候樣に可申付自然末子無之もの養子之理立遣間敷事

付無給者同前之事

一跡目之儀於實子は無相違可立遣之旨先年申聞今以無別條候雖然幼少之者は當分自身之役不相勤候間十五歲より内は親之知行或半分三歩一依其者之年比可宛行之殘知行藏入同前に預り置彼者成人之上以校了可返遣事

付無給もの同前之事

付有限家之儀は可爲各別之沙汰事

一歩行之者跡目之儀於實子は先校了を以少扶持を可遣置事

付養子之沙汰有之間敷事

但當分より可立用に於養子は其者之器量筋目旁其頭僉儀之上於申所は依品可申付事

付用方之歩行之もの可爲同前但養子之儀は其親に不相替役目所勤可仕者に候はゝ其頭僉儀之上可申理事

右以此旨可致沙汰者也

承應三
八月朔日

毛利宮内少輔殿　毛利右京進殿
益田越中守殿　國司備後守とのへ
椙杜兵庫頭とのへ　兒玉淡路守とのへ
堅田安房守とのへ

八日毛利日向守所領六月二十七日夜半大風雨アリ落雷ノ爲書院厨等燒亡ノ報告アリ十六日御國寺社奉行椙岡備前福原相摸兩人ニ命セラレタルモ備前病アルニ因リ林又兵衛ニ任シ相摸又兵衛兩人就職セリ河村又右衛門就勝ニ中間頭ヲ命シ高十石ヲ加賜シ原額十七石ニ加ヘ二十七石ヲ領セシム（爲記錄御中間頭之儀御先代より其筋日之者計に被仰付候然者若黨又は其役難成者にも被仰付樣にては如何候間少身者之中相應之者を被撰可被仰付之旨承應三八月被仰出則一組岡如右之候に付而小身通之中河野文右工門に御中間一組被預置候事）

有地内藏允元勝有故障ニ知行返上毎月堪忍料ヲ賜ハリタルニ元勝老衰ニ因リ男吉左工門勝春へ祿八十石ヲ賜リ堪忍料ハ沒收セラル三上七郎右衛門元安跡職實子新三郎就滿ニ赤川七郎左工門跡職實子忠左工門ニ笠井勘右工門跡職養子半九郎ニ中村久右工門跡職實子半左工門ニ倉增河内信久跡職養子惣兵衛信之ニ命シ各采地ヲ領セシム横山少左工門跡職實子長大夫幼少ニッキ知行百三十石之内六十五石ヲ賜ハル綿貫權左工門就實跡職實子金十郎忠久幼稚ニッキ知行五十六石之内二十八石ヲ賜ハル糸賀長四郎眞朝跡職嗣子無キニ依リ知行沒收セラル

二十八日松野文右工門勝信歸參ヲ命セラレ五人扶持現米四拾石ヲ賜ハル

九月三日毛利刑部少輔元知初テ賜暇謁見時服四羽織ヲ賜フ此時增山彈正少弼正則妹ヲ聚ルヘキノ命ヲ蒙ル

九日公登營重陽ヲ祝ス邸內之祝例ノ如シ

十六日山縣源左衞門嫡六允兩刀ヲ失フ杉山權左工門竊取セリト源左衞門告訴ス審問ノ後證據ナク虛說ニ極ルヲ以テ國退ヲ命ス

十七日紅葉山遷宮將軍ヘ肴三種樽三荷ヲ献セラル

十九日後光明天皇崩於是粟屋九郎兵衞ヲ弔使トシ披露狀ヲ進呈セラル、左ノ如シ

仙洞御所　女院御所　新院御所

近衞殿　九條殿　八條宮　竹門　聖護院

書翰ヲ贈ラル、先方

德大寺大納言　勸修寺大納言　飛鳥井大納言　難波中納言　烏丸宰相

菊亭侍從　樋口中將　樋口三位

當今御附

高木伊勢守　板倉周防守

是時御賻物進獻ノ「ヲ板倉周防守ヘ窺ヒシニ列藩イツレモ無其儀トノ「ニテ止ヌ

二十五日愛宕金剛院ヲ招キ護摩修行例ノ如シ

十月四日閣老諸家公用人ヲ召シ天子崩御ニツキ傳命左ノ如シ

崩御ニ付御赦行被爲成候國々在々科人赦免可致加樣ノ「ハ毎度被仰出候ヘ共今度天子ノ御事ニ御座候間自御公儀御預人吉利支丹ノ外ハ大形ノ科人赦免可仕旨上意ノ由被仰渡

十一月二十一日公御ひたい直シ御袖留ニツキ之ヲ祝シ膳具及三献ヲ進ム御肴一種宛献スル重臣ヘ杯酒ヲ賜フ

二十二日滿願寺燒失（大記錄卷五御目付能勢小十郎水野縣右工門在萩中ニテ國元ヨリ江戸ヘ報告ノ覺書アリ）

二十五日清水五郎左工門元貞跡職嫡子宮內少輔就信ニ命シ采地ヲ領セシム（知行高貳千四百石）

二十八日後西院天皇踐祚

御諱ハ良仁後水尾天皇ノ第七ノ皇子ナリ正保四年ニ花町宮ヲツガセラレ今年今

月十一日繼體親王ノ宣下アリテ今日踐祚アラセラレシ也
十二月朔日例ニ依リ家中出邸歳末ヲ祝ス公雉子間ヘ出テ杯酒ヲ賜フ
三日上野ニ於テ寶樹院三回忌法會滿散ヲ祝シ公列侯ト皆登營
六日將軍重陽ノ内書ヲ賜フ
十二日平川孫兵衛某跡職實子彌三郎ニ兒玉助左衛門元辰跡職其子太兵衛就辰ニ井上五郎兵衛某跡職某子勝右工門ニ命シ各采地ヲ領セシム
十三日節酒二十五日御煤掃ノ式晦日節分御祝等例ノ如シ
二十八日公登營將軍謁見
他日淨錄ノトキ五月十日ノ欄ニ記入スヘシ
五月十日御普請役人力山役歩掛ニ關シ當役中ヨリ町奉行郡奉行等ヘ授クル沙汰書左ノ如シ

覺

一御普請役人力萩ゟ山役之儀先年天樹院様御入城之砌ハ松本上野切口ゟ材木取仕候付テ其御校丁ヲ以山役歩懸被仰付之由候事
一近年ハ山ヲ切荒シ山本遠ク相成候付テ先年一日役ニ御定被成候山役此節ハ何ホトカセキ候テモ所勤難成候付テ御道具衆并御家賴ゟ之役之者痛申之由候條右之通江戸エ相伺候處ニ彌此段於無紛ニハ沙汰可申付之通被仰下候付テ此中其詮儀申付候事
一栫垂木白口つゝら此四色ハ近年之壹人役を二人役に立被遣候事
一わつ立格此貳色は近年之壹人役と壹人半役に立被遣候事
一萱あやら葛したしの柴くろもしおとろケ樣之類は先年御定之壹人役今以不相替候事
一萩より外にて之山役之儀は其節〳〵之材木方存知之衆ゟ歩懸有躰之沙汰仕山役申付儀に候故此度不及沙汰候事
右之分に萩よりの山役歩定被仰付候條御木屋方ゟ之山役右之通を以沙汰可被仕候以上

承應三甲午
五月十日

堅安房
國備後
毛右京
毛宮内

井上六郎右衛門殿 萩町來行カ要路一覽ニハ六兵衛トアリ同人ナルヘシ

右前書之分今以無相違候條此辻を以沙汰可被仕候以上

萬治貳年
卯月朔日

國重九郎兵衛殿　　板遠江

毛利十一代史卷之五

大田報助編次

泰巖公記五

明暦元年乙未(四月十三日改元)正月元日公江戸邸ニ在リ歳首ノ儀前年ノ如シ
二日公登營謁見太刀馬代ヲ献シ將軍ヨリ呉服ヲ賜フ
三日各家ノ證人等登營拜謁献物例ノ如シ
同日門田太郎右衛門跡職嫡子主馬ニ命シ采地ヲ領セシム
二十九日將軍下曾根三十郎ヲ使トシ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ
二月九日將軍歳暮ノ内書ヲ賜フ
十六日御國目付能勢小十郎水野藤右衛門歸府ヲ祝シ藩邸ニ招テ之ヲ饗應セラル
二十四日吉田半左衛門某跡職養子新兵衛就忠ニ命シ采地ヲ領セシム知行六十石
熊谷主計組二十四日五日江戸着柳澤新右衛門組ト交替柳澤組ハ暇ヲ賜リ二十七日

八日江戸ヲ發シ歸國ノ途ニ即ク

二十六日御一門各家及親睦ノ諸家ヲ招キ賜鶴ノ慶宴ヲ開ク執政家ノ饗宴ニ漏レタル方ヘハ一荷二種ヲ贈ラル

三月朔日兒玉三郎右衛門組江戸着繁澤二郎兵衛組ニ代リ繁澤組ハ賜暇四日江戸ヲ發ス

十一日將軍繼統ノ後始テ家門幷諸大名ヲ饗セラレ大城ニ於テ能舞催サル公列侯ト登營拜觀

十六日公列侯ト皆登營將軍ノ病ヲ候問セラル

十九日越後ノ姫君越前侯ヘ許嫁セラル於是銀子百枚紙五丸鶴二羽ヲ贈リ餞ト爲ス

相杜兵庫頭使タリ

二十日大庭源大夫就景跡職實子平三郎景重ニ河井半兵衛成重跡職養子平吉重直ニ命シ采地ヲ領セシム國司半右衛門某去年病死ス生前病中養子請願且養子五郎作幼少ニ因リ知行三拾石之內拾貳石ヲ給リ殘拾八石富川七郎左衛門直之江戸在勤中病死ス八木又兵衛男勝右衛門ヲ養子ニ出願セシニ病中ナルヲ以テ高五十石之內四十石ヲ勝右衛門ヘ給リ殘十石中島喜平次久常跡職生前弟五郎介養子ニ出願セシモ病中養子尙幼少ナルニ依リ知行二十三石ノ內拾石ヲ給リ殘拾三石各公收セラル江木二郎右衛門元直知行八十石ヲ嫡子半右衛門就直ニ讓リ就直嫡子屋ニテ奉仕セシ時ノ給米扶持方三人口切米四石ヲ元直ニ給ラント又長嶺仁左衛門政之知行二拾石ヲ嫡男與右衛門政通ニ給ル扶持三人口ニ三石一斗ヲ二男十右衛門政晴ニ賜ラント各其請願ヲ允ス

同日國司隼人佑就貞江戸御用方裏判役ヲ命ス（就貞國司備後守就正ニ男國司十郎兵衛貞輔家）

二十一日兒玉三郎右衛門元誠ヘ家祿五百石ヲ加ヘ賜フ原額ヘ加ヘ千百四十石繁澤二郎兵衛就充ヘ家祿五百石ヲ加ヘ賜フ原額ヘ加ヘ九百石ヲ領セシム（繁澤系譜寛文九二月兩度之御加增本知引合二千石之辻可領知旨御一行頂戴仕候云云）

按ニ兩人共綱廣公御部屋住以來累年養育輔導殊ニ御手回組ヲ屬セラレ小祿ニテハ勤務ニ堪ヘカタキヲ思察セラレ今回ノ恩典ヲ蒙リシナリ

二十三日越後夫人へ（松平越後守光長室綱廣公御姉）隨屬セラレタル粟屋九左衛門元信病死ニ因リ其子九左衛門就恒ヲ後任トナシ就恒二男忠左衛門義勝モ在府セシメタルニ就恒老極ニ依リ隱居ヲ請フ大夫人義勝ヲ後役ニ命セラレ累代ノ功勞ニ對シ就恒之隱居ヲ允シ知行高二百二十四石之內二十四石本家與三左衛門清堯本知ヘ合セ殘二百石ヲ二男義勝ヘ領セシム（本文ハ粟屋八郎左衛門光實家傳書ニ因ル萬覺書ニハ九左衛門ヘ被下來候知行七十石之儀ハ九左衛門セガレ與三左衛門ニ讓遣候樣ニト被仰出候事トアリ）

同日繁澤二郎兵衛就充暇ヲ賜ヒ江戸ヲ發ス國司備後守就正加判役ヲ免ス

二十九日松平大隅守光久松平陸奥守忠宗松平大膳太夫綱廣森內記長繼證人交替アリ（德川實紀○此時毛利家證人ノ交代ハ何人タルヤ詳ナラス）

四月十五日公列侯ト皆登營十三日京ニテ改元アリシカバ承應四年ヲ改メ明暦元年ト稱スヘキ旨發表セラル

長陽年代記ニ此御方京大阪之御屋敷五月朔日ヨリ明暦年號ト相定御國御勘文ハ六月朔日ヨリ明暦元ト被仰付

二十一日井原伯耆元歲死年七十四

井原彦右衛門元俊系譜元歲井原彦右衛門元良三男文祿三年十三歲ノ時輝元公近侍ニ採用セラレ慶長中軍役相勤同十五年ヨリ十八年迄御國當職奉任祿八百石ヲ領シ多年要職ニ在リト云

三十日當八月朝鮮人來聘ニヨリ往還道筋ニ城モテル輩饗應スベキ旨仰出サル（寛明日記）

松平新太郎　松平安藝守　松平大膳大夫

松平右衛門佐　松平山城守　松平式部

松浦肥前守　青山大膳亮

同日執政ヨリ令アリ朝鮮信使來朝ノトキハ去寛永二十年ノ令ニ據リ我領內上下兩關（赤間關竈關）ニテ接待饗應スヘシトノ事ニテ奉書幷献立付ヲ授ク奉書寫左ノ如シ

一筆令啓候當年八月從朝鮮國信使來朝候然ハ於領內萬馳走之儀可爲如去未之歲候來朝人數之書立ハ從宗對馬守先遣テ可差越候膳部之献立注別紙遣之候自然彼舟遭風波災相定泊候外何之地ヘ令着岸候共船出之綱碇水薪等無滯樣前廉可被申付候恐々謹言

四月十六日

阿部豐後守忠秋
松平伊豆守信綱
酒井雅樂頭忠清
松平大膳大夫殿

是時赤間關ハ毛利右京綱元竈關ハ吉川美濃守廣正父子ニ擔任管接セシメ更ニ毛利右近助就信林肥前守飯尾肥後守ヲ赤間關ニ毛利右京進就賴宍道式部粟屋勘兵衛ヲ竈關ヘ派遣接待セシム

五月朔日公列侯ト皆登營謁見

二日櫻田邸修繕手斧初ヲ行フ

五日端午ノ帷子ヲ將軍ニ献セラル

二十日千代姫君尾張大納言光友室分娩女子出誕二十一日公列侯ト皆登營之ヲ祝ス

二十二日龍昌大夫人病重シ將軍井上河内守ヲ使トシ青山邸ニ就テ病況ヲ訊問セラル

二十四日禁裡造營落成我藩ノ衞工雲谷等爾及等與ヲシテ殿壁ニ圖畫セシムルノ命アリ於是二人ヲシテ上京セシム等爾ハ江戸ヨリ發シ等與ハ國元ヨリ上ル畫圖綱上畢リテ十一月二日京都ヲ發シ藩地ヘ歸ル

六月十日江戸地昨夜地震使ヲ大城ニ出シ候問セシム

十一日將軍端午ノ内書ヲ賜フ

十六日嘉祥ノ式アリ公列侯ト皆登營

二十日大西十郎右衞門吉隆江戸ヨリ歸途病死其子小隼人隆昌堪忍料トシテ米三百俵ヲ賜リ住所ハ隨意タルヘシノ命アリ大西彦左衞門隆亮系譜大坂冬夏之役籠城度々戰功アリ知行高千石ニ召抱ヲレ八百石ノ物成遣サル云云

二十五日龍昌大夫人終ニ逝ク二十七日將軍松平伊賀守ヲ使トシ櫻田邸ヘ來テ喪ヲ弔セシム

按ニ病氣訊問及ヒ弔問ハ親悃ノ御附ミアルニヨリ特例ナルヘシ

大夫人ハ秀就公ノ御室ニテ越前中納言秀康卿ノ女諱ヲ滿子ト稱ス慶長十三年七

月十七日秀忠將軍ノ養女トシテ櫻田邸ヘ入輿セラレ今日逝セラレケレハ江戸愛宕下光明山天德寺ニ葬リ（御墓ヲモ建ツル）法諡ヲ龍昌院殿長谷光山秋英大姉ト稱ス寛文四年十二月萩金沙山周慶寺ヲ改メテ金沙山龍昌院ト爲ス以テ奉祝ノ御寺トス國許ニテ御墓ハ靈椿山大照院ニアリ又京都龍華院幷ニ高野山安養院位牌ヲ安置ス安養院ニハ寶塔ヲモ建ラレタリ

二十七日桂久右衛門機子波多野半作三戸猪之助ト爭鬪半作ヲ殺害スルヲ以テ猪之助ニ自裁ヲ命ス此他關係ノモノ歸國ヲ命シ無罪トナス

七月十四日繁澤二郎兵衛就充南方木工允就康今日着府龍昌大夫人病狀候間ノ爲ナリ就康ハ暇ヲ賜リ八月六日江戸ヲ發ス又同夫人卒去ニツキ國許ヨリ內藤與三右衛門ヲ出京セシメ今日江戸着二十二日歸國ノ途ニ即ク

八月朔日江戸加判毛利佐渡守元包毛利紀伊守元宣ト交代元宣上屋敷都合兼務

四日朝鮮國信使六月九日釜山浦ヲ出帆シ同日夕對馬佐須奈ヘ着本日筑前ノ內アヒノ島ヲ扳錨シテ長門赤間關ヘ着十五日周防蘆關ニ抵ル

二十一日公忌明ノ禮ヲ執ル（寛明日記）又列侯ヘ朝鮮信使迎勞スヘシノ幕令アリ

九月朔日毛利佐渡守ヲ石見守ニ宍戸雅樂頭ヲ土佐守ニ任ス

四日韓使往來ノ時參州吉田驛ヨリ駿州三島驛ノ間ヘ乘馬ヲ準備スヘキヨシ幕令アリテ吾藩ヨリハ有地又右衛門ヲ遣ハサレ馬九匹（三匹ハ用心馬六匹ハ役馬ナリ）鞍皆具七口ヲ備ヘ馬醫一人徒士二人足輕八人中間厩ノ者併セ二十五人六尺ノ者二人ヲ派遣セラル

八日長崎邸員鹽田八郎兵衛ヨリ報告ニ筑前大島ニ於テ捕縛セシ貴利支丹白狀ノ事ト記スル書付アリ（大記錄卷七）

二十一日公忌明初而登營酒井讃岐守ヨリ內報ニ依テナリ（本文ハ萬記錄ニ因ル寛明日記ニハ八月二十一日松平大膳大夫忌明御禮トアリ其時ニ登城ナカリシカ）

二十三日將軍石川彌左衛門ヲ使トシ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ（萬記錄）

十月二日朝鮮信使江戸ニ抵ル

此韓使ハ正使副使從事官上々官上官次官判事官幷ニ中官百六十八下官二百七十四人ナリ姓名畧之

韓使ノ歸國ハ十一月朔日江戸ヲ發ス萬記錄

十二月二日大阪ヲ拔錨シ同二十五日藝州蒲刈ヘ泊シ瀧關ヘハ繫船セス二十九日赤間關ヘ着翌年正月出帆歸國セリ

八日韓使引見アリ公列侯ト同ク大城ニ抵リ韓使ヘ接過ス公衣冠ノ御裝束ニテ陰ノ太刀ヲ佩セラル

二十一日韓使來聘ハテシヲ賀シテ五十萬石以上三種二荷三十萬石以上二種二荷十萬石以上二種一荷三萬石以上一種二荷ヲ献ス在封ノ輩モ三萬石以上ハ樽肴ヲ献ス

朝鮮人來朝記

二十六日毛利右近進就賴ヲ隱岐守ニ任ス

二十八日韓使歸途ニ即ヲ以テ有地又右衛門ヲ參州吉田驛ヘ派遣ス乘馬其他準備總テ來時ノ如シ

同日龍昌大夫人使用セシ上菰并はした暇ヲ賜リ國許ヘ下向ニツキ萩ニ於テ給米左ノ如シ

扶持方四人おまん　同三人おしも

同二人ちや〳〵こ　同壹人宛　はした三人

十一月六日將軍津田平左衛門ヲ使トシ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ萬記錄

十六日禁裡御遷徙アリシ報告アリ德川實記

十九日列侯使ヲ出シ禁裡御移徙ヲ賀ス德川實記

二十一日毛利紀伊守元宣ヲ伯耆守ニ任ス

二十九日親戚諸家及ヒ知音ノ各家ヲ青山邸ニ招キ賜肉開宴ノ式アリ萬記錄

按ニ將軍家ヨリ鷹捉セル鶴又ハ雁雲雀ヲ賜フコト頗ル懇親ヲ以テ藩家ヲ待遇スル厚意ヨリ出タルコトニテ毛利家ニテハ元和四年宗瑞公秀就公ヘ宿驛遞送ヲ以テ御國許ヘ贈ラレシヲ始ニテ寛永正保ノ頃ハ頻年此舉アリシ然ルニ此事態ハ列藩ヲ待遇スル一般ノ定式ト成リ來ル故ニ近世迄モ陸續不絕コトナレハ記載ノ煩ヲ省キ公御一代ノ初メニ是ヲ擧載シ其餘ハ之ヲ略ス幕府ノ定式ヲ觀ルニ鷹捉ノ鳥ハ鶴雁雲雀三等アリ固ヨリ賜品ノ厚薄ニヨリテ拜恩ノ輕重モアリ雁ハ鶴ヨリ

輕ク雲雀ハ雁ヨリモ亦輕シ故ニ家格ノ卑キハ輕品ヲ賜ルコトニナリタルナリ然ルニ國持大名大廣間詰ヘハ輕重トモイツレモ及フコトニナリタリ

十二月三日口羽又兵衛就之ニ江戸留守居ヲ命シ飯田平右衛門就重ノ同僚タラシム

同日神田忠右衛門就久跡職實子虎松ニ命ス九歳ニツキ知行六十石之内四十石ヲ賜リ二十石沒入弘忠右衛門跡職知行四十石之内實子五郎介十三歳ニツキ三十石ヲ賜リ十石沒入平岡八左衛門就房跡職實子市郎兵衛就次ニ命シ知行高五百石ヲ領セシム福原九郎兵衛跡職二百四十石之内實子五郎市四歳ニツキ百六十石ヲ賜リ八十石沒入兒玉與右衛門就貞跡職實子八十郎ニ命ス保利二郎右衛門跡職五十石之内實子孫二郎九歳ニツキ高二十五石ヲ賜リ二十五石沒入山縣太郎兵衛就次知行八十石ヲ嫡男長左衛門就重ニ賜リ就重御小姓給米六十石余三男市之允次知ヘ分與一家ヲ建シム井原伯耆元歳跡職知行八百石ヲ孫彦右衛門就俊ヘ賜リ就俊給米四百石弟勘兵衛就尚ニ賜ルヘキヲ命ス（井原彦右衛門元俊系譜由祖父元歳願建別家）金田九兵衛就直太田藤兵衛資胤領地惡所ニツキ浮米ニシテ賜ラントノ請ヲ允ス高須三郎兵衛元陳幼少ヨリ累年勤務功勞ニ對シ持掛リ扶持方切錢ニ加ヘ高百六十石ヲ賜フ岡部半左衛門利貞知行高百六十石ヲ加賜シ原額ニ合セ高四百石ヲ中村七兵衛元由高百石ヲ加賜シ原額ニ加ヘ高三百四十石ヲ領セシム

二十五日毛利石見守元包毛利伯耆元寛閑老阿部豐後守ノ邸ニ至リ幕府ヘ提出ノ誓紙ニ判形ヲ爲ス

二十八日高須三郎兵衛元陳ニ目付役ヲ命ス

二十九日益田無庵元堯暇ヲ賜リ江戸ヲ發ス三十日毛利石見守元包亦同シ

月日未詳堺住吉社萩ヘ勸請（相府年表）

長陽年代記此年萩濱崎船持大阪ニテ難風ニ逢ヒ堺ノ住吉ヘ立願萩之船皆助リ候依之勸請鶴江惠比須森ニ奉置其節椹本遠江殿當役代官井上忠右衛門

忠正公一代編年史天保九年六月二十八日住吉社祭日公四本松ノ假閑ニ出テ神輿ヲ拜ス

明暦元年乙未ノ歳泉州堺住吉神社ヨリ勸請アリ寛文元年始テ祭祀ヲ修シ遂ニ

萩地ノ大祭ト成ル

明暦二年丙申正月二日公登營謁見太刀馬代ヲ献セラル將軍ヨリ呉服一重ヲ賜フ

三日諸家證人登營謁見

二十三日新帝（花町御所ト称後西天皇ノ御事ナリ）即位ノ禮成於是京都ヘ井原彈正就行ヲ使者トシ祝賀ノ儀品ヲ献進セラル

禁裏ヘ銀子三十枚　仙洞ヘ同二十枚　新院ヘ同二十枚　女院ヘ同十枚　女御ヘ同五枚

右ハ御即位ニツキ禁中ヘ五萬石已上ノ諸大名ヨリ太刀馬代員數幕府ヨリ定ムル所ニ因ル

公御即位ヲ賀シ將軍家ヘ三種二荷ヲ獻セラル（寛明日記公方様ヘ御禮者献上三十萬石以上三種二荷トアリ徳川實紀此献物二月五日トス）

二十四日台德院殿二十五回忌大寧寺ニ於テ法會修セラル御名代福原左近參拜（萬記錄）

二月四日今年ハ公歸國ノ暇出願セザルニ因リ山内左近ヲ使トシ吉川美濃守父子及老臣毛利宮内少輔毛利隠岐益田越中堅田安房板木遠江守宍戸丹波守ヘ書翰ヲ賜リテ國政孜々研精スヘキノ旨ヲ諭達セラル

十四日將軍石川彌左衛門ヲ使トシ鴈捉ノ雁ヲ賜フ

二十二日公親戚及近交ノ諸家ヲ招キ節飯并賜雁ノ宴ヲ開カル

三月三日公列侯ト皆登營上巳ヲ賀ス

二十三日田中又兵衛尉元之跡職實子九郎左衛門就直ニ命シ采地ヲ領セシム

二十六日將軍疱瘡ニヨリテ近侍ノ輩皆赤色ノ服ヲ着ス公列侯ト皆登營每日二度參候セラル

三十七日將軍疱瘡爲祈禱列侯ヨリ伊勢大廟ヘ代參ヲ以テ神樂ヲ上ラル我藩ハ木原二郎兵衛使タリ國許氷上山ニ於テ護摩ヲ修シ符籙ヲ献セラル

同日我藩醫員小川宗順ヲ召シテ將軍ノ病ヲ診脈セシム本日ヨリ朝夕兩度伺候ス

同日桂勘右衛門就忠（御手廻組頭）組共昨今兩日江戸着熊谷主計元實組（熊谷系譜明暦元年ヨリ同三年迄大頭役ニテ江戸御番手御供仕候傳來説）

就忠組ト交替二十八九日兩日ニ出發セリ元寶ハ四月七日歸國命セラル

二十八日繁澤二郎兵衛就充（御手廻頭）組共江戸着兒玉三郎右衛門元誠組ハ就充組ト交替

四月三日江戸ヲ發ス元誠同七日歸國ノ途ニ即ク

四月二日我藩醫員小川宗順登營將軍ヲ診脈ス七日將軍酒湯式行ハル

八日公將軍ノ酒湯ヲ祝シ三種二荷ヲ献セラル（寛明日記三十萬石以上三種二荷ノ事令アリ又從諸大名御祝儀二ノ御丸マテ献上何モ白繩卷樽也又伊勢太々神樂御被御馳斗白諸大名上ル云云）

十八日山口八幡祠官小方左兵衛其他社人本日ノ吉日ヲトシ祠殿ノ林中ニ石清水ノ井ヲ堀リ白銀拾枚ヲ獲ル萩老臣ヨリ將軍家疱瘡全癒ノ際ナレハ八幡ニ於テ祈禱神樂ヲ奏シ白銀ヲ將軍ニ献セント江戸邸ヘ報告シ來ルヲ以テ之ヲ開老ヘ伺ヒタルニ時節柄奇特ノコトナレトモ白銀ハ公邊ニ收納スヘキモノニ非ス云々内諭アリ依テ白銀ハ八幡ニ納入スヘシト國許ヘ通告セリ

二十七日增山彈正妹毛利刑部ヘ婚姻成ル（寛明日記）柿並年表此年正月毛利刑部少輔元知參府二月二十八日毛利元知娶於增山彈正忠正利妹是依大樹家綱公鈞命也清末系譜明暦二年二月二十八日歸嫁按二月二十八日ハ許嫁ノ日ナルヘシ

二十九日將軍疱瘡ノ全癒ヲ祝シ御一門幷旗下ノ諸家百八十八人ヲ招キ盛宴ヲ開キ能舞ヲ奏セシム（寛明日記此時列侯各家ニ於テ能舞興行ノ日割アリ）

閏四月二十八日毛利日向守歸國暇ヲ賜ヒ袷二十下付

五月三日石黒二郎兵衛就政本年二月病死ス生前嫡子藤右衛門就次ヘ知行二百四十石ヲ讓與セント請願中就次モ亦死ス他ニ繼統スヘキモノナシ就政老年迄公乘馬ノ指南ヲ爲セシニヨリ特旨ヲ以テ次男權十郎政道ヘ就次知行二百四十石之内百六十石ヲ政道ヘ給リ石黒家ヲ繼カシム（石黒系譜政道初小林八郎兵衛爲養子實兄藤右衛門早世相續人無之石黒家斷絶後年小林家ヨリ被召歸新規二百石被遣）

五日將軍袖留ヲ祝シ諸大名太刀目錄ヲ以テ謁見在國幷煩ノ乘太刀上ルニ不及ノ旨聞老ヨリ傳達アリ（寛明日記）

十五日公ノ女兄竹子姫ヲ（秀就公第四子）鷹司關白房輔公ヘ緣職ノ件公登營ノトキ大城ニ於テ允許ノ命アリ

鷹司家ヨリ竹子姫縁談ニツキ明暦元年十月十六日家老青木志摩ヲ以テ三ヶ條冀望ノ件知行ヲ添ル事家普請ノ事借銀返却ノ事小箱舊記抄四ニ擧載セリ長文ナルヲ以テ爰ニ錄セス

六月四日神田明神ノ法樂トテ筋違門外ニテ觀世左近勸進能ヲユルサル德川實記

萬記錄六月四日ヨリ七日迄神田橋ニテ觀世十郎兵衛勸進能興行仕候殿樣より御棧敷被仰付候委敷ハ別帳一冊有之

二十二日將軍疱瘡平愈幷ニ袖留ヲ祝シ大城ニ於テ家門諸大名ヲ饗セラレ猿樂アリ

公早朝登營七月六日將軍多賀左近ヲ使トシ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ

二十二日竹子姫出嫁ヲ餞シ在邸諸臣ニ膳具ヲ給ヒ又能舞ヲ縱覽セシム

二十九日毛利右近就信江戸着毛利伯耆元宣ト交替江戸加判ナリ元宣ハ竹子姫ヘ隨從上京ヲ命ラレ直ニ歸國セリ

八月九日牧野吉右衛門跡職養子九郎右衛門ニ粟屋刑部左衛門跡職養子長左衛門ニ福原三左衛門跡職實子長槌ニ能美七左衛門跡職實子四郎兵衛ニ井上七郎兵衛跡職實子清右衛門ニ三井安右衛門跡職實子六郎兵衛ニ井上五郎左衛門跡職實子平左衛門ニ上田市左衛門跡職實子清三郎ニ命セラル山縣太郎兵衛跡職嫡子長左衛門ニ命セラレ長左衛門知行六十石ヲ三男市允ニ賜ル齋藤八郎右衛門跡職姪勝大夫幼少ヨリ養子ニ請願セリ然ルニ請願書去年七月十六日提出八月十四日八郎右衛門病死去ス養子允許以前ニ死去セシ故知行百六十石之內六十石沒收勝大夫ニ百石ヲ賜リ家ヲ繼カシム香川半介跡職實子三之介幼少ニツキ知行八十石之內三十石沒收五十石羽仁甚兵衛跡職實子百介幼少ニツキ知行四十石之內十石沒收三十石ヲ賜ル原田友庵跡職實子權二郎弱年ニテ醫療ヲ爲シ能ハサルニツキ知行五十石之內二十石沒收三十石ヲ賜ル福原五郎市跡職病中親族ヨリ養子ノ請願アリ山下勘二郎跡職弟ヲ養子ニ申請セシモ皆末期ノ法ニ因リ允許ヲ與ヘス

十一日竹子姫江戸ヲ發シ同二十八日京着

十四日逃込者保證人ニ關シ堅田安房歸國ノトキ授ケラレシ奉文アリ左ノ如シ萬記

一走者請人之事　右御中間御馬やの者中まにて請人に立其者旅役にて走候はゝ其歳の御切米之内一石可被召上候御公借請り候て右之過料被召上候義も不相成者は百日之籠舍或は其上にても科之依輕重籠舍可被仰付候併走候砌日限を切請人被預置其内に手遣候て召戻候はゝ無別條可差免哉何も走者請人之儀は御國元にてとくと御沙汰尤候此外町人或は奉公人請に立候はゝ走候者之御恩壹ヶ年分不殘調可被仰付候事

付走者品により請人罪科にも可被行事

付御家賴又内走者之儀は前かと約束書物之辻内證にて請人へ申届其書物之辻無相違任其意候はゝ別條有間敷候自然前々は堅約束書物等相調走候以後其書物相違候て請相承引不仕者之儀は主人よりの御理聞届於無紛は被加御下知可被遣事以上

申八月十四日

二十七日毛利右京綱元始て家綱將軍ニ謁見太刀金馬代帷子單物十献上于時七歳並佩

年表

九月十六日竹子姫鷹司房輔公へ婚姻ノ禮成ル二十二日清泰院逝去大献院殿養女松平筑前守光高室

公列侯ト同ク登營拜弔

二十八日赤川玄清醫員天野藤右衛門重次竹子姫ヘ隨從ヲ命セラル、ニ因リ玄清知行高三十石加賜原額ニ合高百石ヲ領セシム赤川玄樂系譜重次知行高三十石加賜原額ニ合高八十石ヲ領セシム

日不詳萬代又兵衛組ノ御中間ヲ小川市右衛門治房ニ付屬セシメ知行原額高九石ニ十八石ヲ加賜シ合額二十七石トナシ御中間頭ノ資格ヲ與フ

十月十六日來年大城修繕ニツキ銅并絲青進献ノコト關老ヘ申請セラル

二十七日將軍ヨリ呉服十ヲ賜フ竹子姫婚姻ノ故ヲ以テナリ

晦日將軍下曾根三十郎ヲ使トシ鷹捉ノ鶴ヲ賜ソ

十一月二日波多野源兵衛就通目付役ヲ免シ三田尻公用命セラレ桂權左衛門ヲ以テ後任トス

八日波多野源兵衛就通多年ノ勤役ニ對シ高百四十石ヲ加賜シ原額ニ加ヘ三百石ヲ領セシム

同日吉川監物廣嘉鷲尾大納言隆量卿息女ヲ娶ルヘキノ旨閣老ヨリ傳フ依テ之ヲ美濃守ヘ傳達セラル又福原左近姉益田主馬緣職ノ件許命アリ

十二日竹子姫結婚ヲ祝シ御一門中并旗下ノ知音ヲ招キ饗應セラル

十四日江戸當役椙杜兵庫就行病死五十四歳

二十一日毛利右近證人長槍病氣ニ因リ代トシテ妹ヲ上京セシメ長槍歸國療養ノ請願證人奉行ヨリ允許ノ命ヲ傳フ

二十二日兒玉淡路元恒ヲ召シ椙杜兵庫死去ニ依リ江戸邸内外ノ公用勤務スヘキノ旨公及越後夫人ヨリ命セラル（越後夫人ハ松平越後守光長室綱廣公御姉）

十二月二十六日矢田勝右衛門跡職嫡子忠左衛門ニ繁澤平左衛門跡職實子七十郎ニ高須市允跡職長九郎ニ久芳與三右衛門跡職實子三三郎ニ大庭喜左衛門跡職實子正右衛門ニ岡村孫右衛門跡職養子孫太郎ニ命セラル

二十七日椙杜兵庫跡職嫡子隼人就德ニ命シ二千八百四十石ヲ領セシム又就幸遺書ノ旨趣ニ依リ二男外記就茂三男左門重幸ニ各三百石宛ヲ賜フ是時御書之案左ノ如シ

一書申候椙杜兵庫跡目此節可申聞と存遺言之次第如何共有之候哉と相尋候處書置差出候故一覽候然處彼書置には子共三人へ兵庫知行分遺候樣にと申置候然共兵庫頭儀は幼少より召仕此節迄別て奉公仕たる者之儀候第一先代已來實子有之跡目之儀は無相違立遣たる例に候條本地二千八百石余之儀は惣領隼人に可遣候條此段隼人に可被申渡候外記左衛門事も往々取立可遣者に候間只今不及沙汰儀に候得とも兵庫申置に兵庫知行之内五百石宛か三百石宛か分遣候樣にと申置候首尾に候條新儀に三百石宛外記左衛門に可遣候通於此地申聞せ候間可被得其意候其元へ令談合可申聞候得共兵庫儀は別て不便に存に付不及其儀申聞候間左樣可被相心得候恐々謹言

十二月二十七日

毛利宮内少輔殿
毛利隠岐守殿
益田越中守殿
堅田安房殿

二十八日公登營ノトキ來年正月二日大城着座之順序傳命アリ

是冬靈椿山大照院落成秀就公ノ御菩提所トナシ當榮寺徹首座ヲ以テ住職トス（爲覺書御位牌所影前供料毎年現米百石下付又徹首座井隱居藤長老冀望ニツキ平安寺連首座ヲ常榮寺住職ニ命セラル）

按ニ大照院ハ元ト歡喜寺ト稱シテ往古ヨリ阿武郡椿郷今ノ大照院ノ地ニアリ慶安四年大照院殿ノ靈柩入ラセラレシ後今ノ寺號ニ改メラレシナリ此造營ハイツ頃創始シテ何ッ頃竣功セシヤ記載詳ナラサレ共造營ノ主管ハ山田治部大輔元資ニシテ事務ヲ專任セシハ中島忠兵衛就眞ニテアリシ中島家藏ノ奉書等ノ文意ニ據レハ此造營ハ數年ヲ經テ其間日夜ノ辛勞ヲ慰セラレシコトモ見ヘタリ又極月二十九日ノ奉文ニテハ御寺成就ノ事山内治部大輔言上シテ御小袖二ッ御羽織一ッヲ褒賜アリシコト見ヘタリサレハ大照院殿御入寺以後間無ク斯事ヲ創始シテ明暦二年ノ冬ニ至リテ其功ヲ竣ヘシ以テ證トスヘシ○寺傳ニ云此寺上古月輪山觀音寺ト稱ス後改テ大椿山歡喜寺トス草創年紀ヲシラス中興義翁和尚建武二年入寂大照公ノ靈柩ヲ納ルニ及テ復今ノ稱ニ改ム

本記拾遺附錄

二月二十二日郡奉行兒玉傳右衛門郡究トシテ派出ニッキ當職堅田安房ヨリ御代官中ヘ授クル奉文左ノ如シ

吉敷郡熊毛上之關大島郡爲郡究兒玉傳右衛門被差出候條御扶持方拾人分萩被罷出候當日より歸着當日迄一人日別五合宛之勘合を以旁才判所にて可有勘渡候請取狀被取置可被備御算用候恐惶謹言

明二ノ
二月二十二日

櫻井市之允殿　堅安房

東條九郎右衛門左
神保市郎右衛門左
河野市郎兵衛左
坂井喜左衛門左
粟屋五郎兵衛左
山縣善右衛門左

兒玉傳右衛門於在々百姓等え耳近申聞せ候覺書如左

覺

一天下御法度とは江戸將軍樣より被仰出儀也連々とは年々被仰渡候事也公儀より被仰出とは萩殿樣より被仰付事先年已來郡奉行御所務代衆被申渡分今以無相違候條彌背不申候樣可申渡候事

一天下送無滯送事肝要なり其外舟にてもゝ天下たらは夜白ともに無緩せ樣に可申渡井殿樣より御用付而繼送傳馬等是又無滯送申事なり自然延引候て御用相闕不申候はゝ一廉可被仰付事

一貴利支旦宗穿鑿之儀自然不審成もの來候はゝ心付事肝要也又內々他宗にて候共人之心は不慮に替儀候間不審成事候はゝ五人組之者共より訴へ可申事

一道橋取繕大道筋之者不及申山之奥迄も人馬往來共支りのなきやうに堅固に仕事也堤井手川除修補之儀御代官庄屋申付候處無緩せ作に支り不申內々情を入取繕可仕候自然代官庄屋申付疎に候はゝ面々之身爲候條小百姓御所務代衆迄可申理事

一御代替之御ケ條如書面之申渡候事

一對公儀諸事企惡調儀發起之族あらは可訴之惡調儀とは公儀何事に付而も御爲惡事を仕出候事也加樣之儀申渡候上承引不仕仕出候はゝ一廉御法度に可被仰付事訴へるとは脇より何かし如何樣成儀仕と申出る事なり縱共同類たりといふとも其品によつて御褒美を被遣又は其者立身をも可被仰付事

一庄屋畔頭手前に非道成儀於有之は可申出事此段御沙汰被成有躰に被仰付可被

遣事自然非道之儀申出候はゝ御法度可被仰付事

一如何躰之公事有之共數人一味之訴訟甚以不謂儀に候條各左樣に可相心得事

一諸勧進停止之事

但氏神旦那坊主え之儀は各心おちにては不苦候事其外之儀は不入儀候事

一御所務之儀春定に被仰付百姓能作立德分有之共春定無相違御所務被成遣惡敷仕候百姓は有躰に御檢見被仰付被遣候事誠に有難被仰付樣候間忝なき所と存辨作に精を入來作は今年より其仕置を仕隨分〳〵其作廻無緩仕御納所をも堅固に相調自分之堪忍をも仕り覺悟肝要之事なり此段申聞所色々可有之候事

一中算用七月晦日を切りに公勘相調候事殘米有之新米にうち合不申樣にとの事

一延算用之儀代官衆能々被相究百姓より調問敷小つなき物なと庄屋畔頭引取不申候樣に念を入印判被突候哉能〳〵申渡事百姓共え其段尋候事

一公儀より立被遣飯米小百姓え無相違勘渡候哉庄屋畔頭え相究百姓請取候哉と相尋候事

一庄屋畔頭自用に小百姓遣不申候哉究之事

一春定相添候て小百姓え下札則相渡候哉小百姓受取候哉相尋候事

一延算用之外小つるき小かゝり無之候哉若於有之は日記差出させ見申候事

一公事本引なしに被仰付候非公事申出候は依品過料籠舍御成敗に被仰付候事

明暦三年丁酉正月二日公衣冠ノ裝束ニテ登營御着座配左ノ如シ賜杯式是迄ハ一献ノ御祝タリシカ今年ヨリ三献ノ式ニ復セラル又時服拜領例ノ如シ

一松平陸奥守　二佐竹修理大夫　三松平薩摩守　四京極丹後守

五公　六上杉播磨守　七細川越中守　八松平伊豫守

九松平美作守　十松平對馬守

十八日コノ曉ヨリ乾ノ風甚シク塵土ヲ吹揚ケテ咫尺モ見ヘ分タス夜明ケテモ夜ノ如シ然ルニ甚後本郷丸山本妙寺ヨリ火ヲコル去年ヨリ旱ツヽキ殊ニ冬ヨリ春ニ至リ一雨モナカリシカ泉井殆ト涸テ消防ノ便ヲ失ヒシニヨリ一瞬ノ間ニ大火トナリ駿河臺鷹匠町邊大名旗本ノ家ヲ燒ハラヒ鎌倉河岸マテ燒出シ西風強クナリ一石橋

鞘町邊ヘ飛火シ傳馬町ニ及フ中略スベテ火ヲ避ル貴賤ノ男女コヽマテ逃來リ後ヨリ火ハ次第ニ燒來ルニ門ヲ出ル事能ハズ號哭ノ聲ヲビタヾシクセンカタナサノマヽ先ニ進シハ溝中ニ飛入リ後レタルハ火ニヤカレ死スルモノ萬ヲ以テ數ルニ至レリ總テ此日ノ火災北ハ柳原南ハ京橋東ハ佃島深川牛島新田ノ地民家乏シキ田圃ニ至リテヤミヌルトゾ夜中二九檜ニナラセラレ火事サマ御覽ジテ消防ノ輩ニ心イレ力ヲツクスベキ旨仰出サル德川實記

十九日大風ナヲ止マス沙土ヲ吹揚タリ市井大路ニハ男女號泣シテ昨日焦死ノ尸骸ヲ尋ネメグルモノ道モサリアヘヌハカリナリシニ又午剌小石川鍛匠町ヨリ火起リシトイフホド忽ニヒロカリ北ハ駒籠ヲカギリ南ハ外郭マデニ及ビ暮方ニ風メグリ郭内諸大名ノ邸宅ツラヲ燒數寄屋橋内外日本橋京橋新橋ソノ他ノ橋々モ落ケレバ茲ニテ死スルモノ若干アリ此火ハ南ノ海涯ニシズマリシニマタ夜中麹町ノ市屋ヨリモヘ出デソノアタリ士民ノ家ヲ燒キ雉子橋一橋神田橋マデヒロガリシガ風北ニカヘシテ大名小路ノ大厦高樓一宇モ殘ラズ西城下櫻田ニイタリソレヨリ火二筋ニ分レ一筋ハ通町一筋ハ愛宕下ヨリ芝浦マデ盡ク灰燼ト化シヌコレヨリサキ水戸幷ニ兩典ノ邸宅本理院殿天樹院殿ノ御第ドモハヤ烏有トナリ北風烈シク黑煙ヲ吹カケ本城ニノボルカ如クナリシコロ天守二重目北西ノ銅窓ノ戸内ヨリ開キ火ヲ吹コミ天守先火ニナリ富士見檜ニモウツリケレバ殊更人數ヲ加ヘ西大手山里吹上外櫻田ヲ防ガシメ近習ノ輩供奉シテ西城ニ移ラセ給ヘバ後閤ノ女房ヲバ留守居ノ人々引ツレテ御先ニマカル凡ソ兩日火ニ本城幷ニ二三九ヲハジメ諸大名ノ邸宅其大ナルモノ五百軒士庶ノ屋舍ハ數ルニ遑ナシ神社佛閣三百餘所倉廩九千アマリ橋梁六十市井八百町或ハ五百余町道程ヲ縱横ニ計レハ二十二里八町盡ク焦原トナリシカバ歷世ノ舊記武具寶珍多年此時ノ災ヲ免ルヽモノ公私トモイト稀ナリ天正十八年府ヲ此地ニ開シヨリ以來イマダアラザル天災ト云ベシ德川實記

柿並年表云正月十八日江戸櫻田御屋敷御類燒ニ付御造佐入多ク江戸上方長崎御借銀御調被斷候事ニ付江戸御國御當役衆御相談之儀有之云々

是時越後ノ邸モ類燒セシニヨリテ母公高田殿ハ暫ク吾青山邸ニ移リ寄寓セラレ

此移居モ台意ヲ經タルヿト見ヘテ此時公ニハ增上寺防火ノ任ニ當ラセラル、故ニ福間彦右衛門ヲ御使トシテ執政松平出雲守ヘ請テ若シ吾邸近火ノ時ハ公ニハ任所ヘ赴カス高田殿ノ御心添アリタキ旨ヲ申入ラレケレハ追テ執政ヘ窺ヒテ公ノ請願ノ通リニテ然ルヘキヨシ回報アリ五月二十三日越後ノ邸ヘ還リ移リ玉ヒケル（萬記錄越後樣御屋敷ヘ御假屋出來候テ高田樣御前樣トモ御移ナサレ候トアリ）

按ニ高田殿ハ前將軍秀忠公ノ御女ニテ越後忠直卿ノ室光長卿母公ナリ越前家系譜ヲ按スルニ寛永元年六月光長卿越前ノ領國ヲ轉シテ越後國高田城ニ封セラレシ時御母高田城ニ封セラレシ時御母高田ノ御方ト共ニ越前北庄ヲ發高田江戸ニ抵ルトアリ寛文十二年二月廿一日卒去法號ヲ天崇院殿隱譽泰安豐壽大姉ト稱ス

二十日風靜マリテ雪降ル火ニ免レテ焦死セル人民雪ニ埋レテ凍餓スル者亦多シ官命シテ府內六ケ所ニ小屋ヲカケ糜粥ヲ施ス飢民粥ヲ受ルニ器物ナク燒瓦ニ捧ケテ之ヲ喰フ書院番二人ヲ馳セテ東海道ヲ經テ大坂城ニ至ルマテ各驛村ニ報シテ將軍安否ノ旨ヲ告ク（德川十五代史）

二十三日三家諸大名登營謁見

二十五日幕府大火ニヨリテ令ヲ發ス

覺

一今度燒失之侍屋敷幷町中制替所々有之候間當座之小屋掛候共成程輕ク可致之事

一同屋作之事縱雖爲國持大名三間梁ヨリ廣クハ可爲無用勿論輕被相建用意可有之事

付二階門停止タルベシ幷駒寄セ先無用之事

一衣類之儀以來御定可有之間分限ニ應シ跡々ヨリ成程輕キ物ヲ可相求但令所持衣類ハ當分不苦事

附今度火事ニ付諸道具拵候共金銀ノ金具幷梨子地高蒔繪之類可爲無用事

一浪人好身之者歟由緒有之輩來ニ於テハ可差置之但大勢集候義可爲無用事

一小身之面々妻子等心次第關所ヨリ內在々所々ヘ可差置事

一領内ニ有之山林面々常ニ雖不伐之候今度ハ商賣ニ可申付之但從公儀留山ハ受差圖可任其意事

一一季居之輩如例年出替之節於暇ハ今度火事ニツキ先々ニテ可令迷惑候間給分扶持方食物抔不足候共可爲勘忍次第ト於申ハ其儘可差置候勿論暇ヲ乞候者出シ可申事

正月二十五日

二十六日諸大名ノ留守居役ヲ營中ニ召シ昨日ノ令條ヲ授ケラル

二十九日飢民ニ粥施サル、事來月二日マテ行フヘシト重テ令セラル又此日令ヲ發ス左ノ如シ

覺

一一季居之輩如例年出替之節暇ヲ出候ニ於テハ今度火事ニ付先々ニテ令迷惑候間給分扶持方食物等不足候共其儘堪忍ス可ト申候ハヽ可差置勿論暇ヲ乞候者可出之由最前相觸候得共當年ハ一季居一切暇ヲ不可出去年之給扶持ニテ前々ノ諸人ヲ以可立替セ申候者可任其意候但主人相對ニテ暇ヲ出候ハ不苦候以上

正月二十九日

二月六日高田殿（畧傳前ニ出ツ）吾青山邸ヘ移居セラル十日諸大名登營將軍大番所ニ臨ンテ之ヲ見ル十一日大城ヘ留守居ヲ召シ閑老ヨリ令條ヲ授ク左ノ如シ

覺

一御本丸炎上候早速御營作雖可被仰付下々之家屋悉燒失候間當年ハ被成御延引候然諸大名御旗本之面々町中迄其心次第輕ク作事仕候歟又ハ小屋掛可申付之旨被仰出者也

二月　日

覺

一拾萬石以上國持大名迄先從當年三ヶ年之内參勤之進物時服十御太刀馬代金壹枚時服三重二重應分限此等之内可上之九萬石ヨリ五萬石迄太刀馬代金壹枚四萬九千石以下同壹枚

一五萬石以上國持大名歳暮之御祝儀進上呉服五二重三重此内ヲ以可差上之右應分限端午重陽ニハ猶以可爲減少下々音信贈答モ參勤端午重陽歳暮モ可爲無用事

二月　日

是時開老口頭令達アリ

一平川口きし橋たつの口内櫻田代官町此曲輪之内屋敷御用之由候事

一此外屋敷之脇道せはき所之儀は御普請奉行見合次第其沙汰可有之事

一此後作事先日も被仰出候樣に彌三間はりより廣きは無用之事長さ之儀は好次第不苦之旨被仰出候事

一今年必普請可仕にても無之候共段は勝手次第可仕事

一御本丸御作事今年被指延候儀は下々御救之ため被成御延引候事

右御五ヶ條御口上にて被仰渡候以上

二月十一日

又今度ノ災ニ居宅燒亡セシ輩ニ恩貸幷ニ賜金ノ制ヲ定メ發布セリ

十四日我櫻田邸辻番所ヘ井上筑後守ヨリ切紙ニ喜兵衛是ハ毛利五郎左衛門者孫右工門是ハ井上村百姓籠奉行石出帶刀宿淺草新寺町善慶寺トアリ十六日歩行衆鳥居彌兵衛永原五郎右工門ヲ石出帶刀宿所ヘ遣シ其旨趣ヲ聞クニ毛利五郎左工門者平兵衛（右之切紙ニ喜兵衛トアルハ名違平兵衛之事之由）井上村百姓孫右衛門ヲ許シ國許ヘ返サル云々（中畧）十七日彌兵衛五郎右工門帶刀宿所ヘ赴キ兩人請取ノトキ請狀之趣ハ

差上申手形之事

此黑瀬平兵衛河屋孫右衛門きりしたん之由訴人有之に付籠舍被仰付被遂御穿鑿候處宗門之心さし無之由其上今度籠屋燒失之砌奉行帶刀追拂被申候處欠落不仕罷出候に付被成御赦免我等に御預ケ被成候以來御用之儀何時成共召連可罷出候爲後日手形仍如件

明暦三年二月十七日

松平大膳大夫内
鳥居彌兵衛

御奉行所　　永原五郎右衛門

右之請狀ニテ請取三月四日兩人歸國セシム此黑瀨河屋ハ下ノ關住民新藏出訴ニヨリ慶安四年正月晦日江戸呼上サレ七ケ年入獄セシモノナリ

二十七日幕府ヨリ發布令條左ノ如シ

條々

一火事之砌如此已前御弓鐵炮御預ケ之面々辻々警固有之候ヲ相改候間役人幷已のかゝる親類又はしうとむこしうとの外一切其場へ不可罷越事

一火事之場へ下々相越理不盡に於罷通は御法度之旨申聞せ一切不可通之若承引無之は可搦捕之萬一及異儀は可爲討捨事

一自今以後火事之場にて金銀諸道具等拾取は即時町奉行所へ可持參之若隱置脇よりあらはるゝにおゐては可處罪科幷拾ひ物令隱置は可出訴人縱雖爲同類其科ヲ免シ其品ニ寄御褒美之高下有候而急度可被下之勿論盜取輩アラハ可訴人是又御褒美可被下候事

右之條々可相守之若於違背之輩ハ速ニ可處嚴科之旨依仰下知如件

二月二十五日

二十九日燒屍ヲ本所牛島新田ニ瘞埋セシメ其地一大塚ヲ營シ增上寺方丈ヲシテ回向セシム金三百兩ヲ賜ヒテ其料ニ充ツ四方ノ民感泣來リ拜スルモノ多シ小石川智光寺ノ僧息精舍ヲ其塚上ニ營ミ一寺ヲ建ツ是ヲ回向院ト號ス（德川十五代史）

德川實紀云こたびの大災ニ燒死せし男女十萬八千餘人（回向院過去帳には二萬二人とす）下畧

三月三日諸大名登城上已御禮有之

十五日四月暇ヲ賜フベキ大名ヲ皆其國邑ニ赴カシム火災ニヨリテ人ヲ減スルカ爲ナリ（德川十五代史）

十八日乃美三郎兵衛跡職嫡子仁左衛門ニ井上丹後跡職男七郎三郎ニ命シ采地ヲ領セシム

二十三日執政ヨリ令ヲ傳フ去々年大内築造ノ料ヲ五萬石以上ノ諸藩ヘ割賦シテ一萬石ニツキ銀子三百拾五文目宛ヲ募收スヘキトノコトナリ

因テ吾藩ノ石高ヘ當ル拾壹貫六百三十六文目ヲ使者ヲ以テ京都所司代板倉阿波守ヘ進納ス

二十六日證人毛利吉十郎代毛利主殿毛利長槌療病歸國之間代妹おユリ江戸着二十七日兩人證人奉行ヘ伺候ス

四月三日證人毛利齋宮長槌改名毛利吉十郎歸國セシム

十七十八十九日之内山内治部元貢組之大番江戸着桂木工頭就忠組ト交替桂組ハ同日之内ニ江戸ヲ發シ歸國ノ途ニ即ク

二十一日去ル七日ヨリ上野ニ於テ大猷院殿七回忌法會行ハル公參拜銀子二十枚納メラル

二十二日法會滿散ニ因リ公登營謁見

二十七日天樹院殿三十三回忌堅田安房就政承君命再修靈塔也柿並年表

按ニ相府年表天樹院様三十三回御忌ニ付於高野御石塔御造立ト載ス柿並年表ト同時ノモノカ詳カナラス

同日兒玉三郎右衛門元誠組江戸着

二十八日繁澤二郎兵衛就充組共御番所詰ヲ免ス同日久世廣之命ヲ傳ヘテ三家ノ輩ノ献供ノ物善美ヲ盡ス時ハ諸大名皆其風ニ習フ甚儉素ヲ失フ故ニ華飾ノ献物スルコトナカラシム

五月朔日御國當職堅田安房就政ヲ免シ板本遠江守就時ヲ以テ之ニ代フ柿並年表四月二十九日

日リ江戸當役堅田安房就政再役又十二月上トアリ

同日江戸加判益田修理就固一人役萬記錄六月六日益田修理江戸着十一日益田修理加判役可相勤ノ旨御直ニ被成御意御請申上候事

柿並年表及役人帳ニハ明暦三酉三月上トアリ何レカ是ナルヲ知ラス

同日乃美五左衛門就易江戸御用方裏判役ヲ命ス國司隼人佑就貞ノ後任タリ

龍昌大夫人ニ隨屬セシ侍女給米銀左ノ如シ

三人扶持ニ米二拾石銀拾枚

おみつ

四人扶持ニ米貳拾石銀拾枚　おやす
三人扶持ニ米拾五石小判五兩　おこわ
同　小侍從
同　おさあ
二人扶持ニ米拾五石小判五兩　おすけ
二日熊谷與右衛門跡職實子七郎兵衛ニ命シ采地ヲ領セシム
二日三日繁澤二郎兵衛就充組共江戸ヲ發ス
三日家門幷ニ五萬石以上ヨリ端午ヲ賀シ時服ヲ献ス
五日蒲節例ノ如シ
九日本城經營始メアリ
十一日將軍石川彌左衛門ヲ使トシ鷹捉ノ鶻ヲ賜フ
二十三日高田殿新第ニ引移玉フニ依リ公登營之ヲ賀ス
同日吉川監物廣嘉紫尾大納言隆量ノ女ヲ娶リ岩國ニ於テ婚儀ヲ舉ク

廿四日宍戸土佐就附ニ江戸土佐就附ニ江戸加判ヲ命シ益田修理就固ト兩人タラシム柿並年表
六月十三日家門諸大名端午ノ賀物ヲ献セシ家々ニ御内書ヲ賜フ
十五日豐島彌左衛門跡職實子傳兵衛ニ命シ采地ヲ領セシム
十六日嘉定例ノ如シ公長袴ニテ登營昨日執政ヨリ傳命ノ如ク着座セリ御座配ハ松平加賀守其次公其次細川越中守ナリ
二十一日毛利刑部元知歸國暇ヲ賜ヒ時服六拜領二十七日宍戸土佐就附毛利右近就信代トシテ江戸着就信此日江戸ヲ發ス柿並年表五月二十四日宍戸就附ニ江戸加判役ナ命スト載ス宍戸系譜明暦三年六月江戸羅越スト柿並年表ハ誤謬ナワンカ
同日先年來土木工事助役ノ箇所提出ノ事永井彌右衛門ヨリ傳命アリ其條書左ノ如シ

松平大膳大夫亥ノ歳以來御普請役仕候覺

一常盤橋之北之方平石垣幷角一ツ

一同所ノ水たゝき石垣一ケ所
一麹町四ッ谷口御見附升形御矢倉壁一ケ所
一神田橋ノ水たゝき石垣一ケ所
一櫻田御成橋ノ水たゝき一ケ所
一溜池敗石之内一ケ所
一きし橋神田橋平石垣一ケ所
右丙子之年正月八日ヨリ同四月二十六日迄ニ仕候事
一内櫻田馬下馬之御門臺御見付ほう當築直シ
一二ノ御丸御鷹部屋之脇のくひ遠築直シ壹ケ所
一外櫻田口平石垣並角二ッ築直シ
一半藏門口御門臺築直シ一ケ所
右丑之年十月十一日ヨリ寅ノ年四月二十三日迄ニ仕候事以上
右御尋ニ付書付差上ケ申候以上

丁酉六月二十七日　福間彦右衛門

永井彌右衛門様
人々御中

七月朔日將軍荒木十左衛門ヲ使トシ鷹捉ノ雲雀ヲ賜フ
七日當賀例ノ如シ
十九日雲雀ヲ賜ル爲メ親族其他ヲ招キ饗セラル
八月朔日當賀例ノ如シ
三日長門三島ヘ朝鮮ノ船漂蕩ス此夜颶風ニ逢ヒ搭乘ノ人多ク沈溺僅ニ免ルヽモノ三人上陸セルニ依リ吾藩小林瀚右衛門ヲシテ應接セシム其顛末ヲ長崎奉行ニ報告シ三人ヲ護送ス是時吾藩老臣ヨリ問書渠ヨリ呈書及筆談詩文等無盡集卷ノ五ニ載ス今冗長ナルヲ以テ茲ニ錄セス
七日藏田半左衛門跡職養子左門ニ田阪甚右衛門跡職實子權之介ニ命シ采地ヲ領セシム

九月四日馬島八右衛門跡職實子半三郎ニ命ス五日重陽ノ時服ヲ献スル例ノ如シ

二十七日來年本城構造ノ助役ヲ大名ニ命ス一萬石ニツキ人夫百人ヲ出サシム（德川十五代史）

十月三日毛利日向守就隆參府登營銀馬代ヲ献ス

十八日先是我芝邸ノ地ヲ返還シ更ニ我青山下屋舗近地ニ於テ若干ノ地畝ヲ賜ント請フ今日許可ノ命アリ同二十五日査官來テ青山邸東北ノ地ヲ分テ我ニ與フ此時坪數ノ調査モ無ケレハ後ニ是ヲ測量セシニ凡九千七百八十七坪ノ方積ナリ前ニ進納ノ方積ハ五千百六十九坪ナリ同日將軍重陽ノ内書ヲ賜フ

二十六日大城ニ於テ家門並諸大名ヲ饗セラレ猿樂催サル

十一月二十六日將軍水野庄左衛門ヲ使トシ鷹捉ノ鶴ヲ賜フ

十二月五日大照院境内狹隘ニツキ北面ノ谷田畠高拾石壹斗寺内ニ付シ大照院ニ賜ル

八日堅田安房就政江戸着

九日御一門并親交ノ旗本各家ヲ招キ賜鶴ノ慶宴ヲ開カル

十三日萩地ヘ賜鶴ノ報アルニ因リ諸臣登城之ヲ賀ス

二十八日歳暮拜賀例ノ如シ

二十九日乃美半兵衛跡職實子八郎右衛門ニ皷忠左衛門跡職嫡子權兵衛ニ命ス喜多村三郎右衛門跡職實子萬吉幼少ニツキ知行高百六十石之内六十石没收百石小方半兵衛跡職實子長吉幼少ニツキ知行高八十石之内三十石没收五十石ヲ賜フ

同日災後ノ故ヲ以テ明春私ノ年賀ヲ止ム（德川十五代史）

本記拾遺附錄

二月二日去年一般凶耗米價沸騰ニ至リ國内諸民飢餓ニ陷ラサラシムルト云ニアリテ他國ヘ米及雜穀販賣輸出ヲ禁セラレタルヲ以テ地當役中ヨリ江戸當役ヘ報告書左ノ如シ

追テ得御意候去惡年ニ付以外米高直ニ相成此節は銀百目に付一石七八斗之相場にて御座候然は太底賣米無御座候惣て諸國共に米高直に有之候故か他國より米

買船數艘參り御國中に有之米をも多分買取申樣に相聞え候左候時は彌米少相成縱銀子所持仕候ものも米買候事不罷成下々餓死に相極候此節さへ右之相場に候へは此以後いかほと高直に可相成段難計被存候第一今年は公儀御買米も漸三千壹貳百石ほと有之儀に候へは何と候ても下々可相救行無之候去秋以來大分米他國え出申之由には候へ共責て賣殘之米少成共有之候はゝ押置國中にて賣買仕候はゝ少は甘にも可罷成と存各相談之上今月朔日より他國之者え米賣候事停止に申付候扨又雜穀物之儀も上方より船參り買取申之由候去夏百姓等爲救豐後表え麥買に人を差遣候處他國え差出候事停止に被申付之由にて買來候儀不相來候然時は他國え之短束も不相成事候故雜穀物其外何にても下々食物に相成候物をは他國差出候事一圓指留可申之通御所務代中えも手堅申渡候御隣國九州表之樣子承合候處去夏も大形右之分に有之たる樣に相聞候打續たる惡年何共苦々敷儀共笑止千萬存候何とそ麥作出來能有之麥に取付候迄取續申度存儀候只今之分に御座候はゝ下々可爲飢饉と心遣ひ此時御座候御國中之米此節より他國え買取事指留候時は自然何角取沙汰も可有之哉と存爲御心得如是候乍此上も何とそ萬民不及飢饉樣と各申談氣遣仕儀も自然御沙汰之節は右之趣被仰上可被下候恐惶謹言

二月二日

堅安房殿　　板遠江殿
益孫左衛門殿　　益越中殿
毛隠岐殿
毛宮内殿

三月二十八日大津郡へ寄鯨アルトキ割符分口方法幷突鯨ニ關シ當役中ヨリ御所務代へ授クル條書左ノ如シ

鯨分口之ヶ條

一寄鯢之儀は御藏入之浦え寄申候は三ッにわけ二ッ分公儀え指上ケ一ッは浦人え被遣儀候給領之浦え寄候鯨之儀は三ッにわけ一ッ分公儀え指上ケ一ッ分給

主え一ッ分浦人え前々より被遣來候間自今已後も彌此辻を以沙汰可被申付候
御藏入給領共え浦近所之地方之もの雜用薪明俵等其外浦人に相添肝煎候所之
儀は浦人え被遣候三歩一之鯨之内を以浦人校了次第地方えも遣候樣に沙汰可
申付候事

付寄鯨浦人計にて漕寄候儀不相成候時は尤地方より加勢可仕候左候時はわ
け口之儀彌右之次第に可被申付候事

一御藏入給領共に一圖に浦人居不申地方計之所え寄候鯨之儀は地方之者つなき
置注進仕浦人之ごとく肝煎中にて可有之候條左樣之所之儀は浦並之わけ口に
沙汰可被申付候事

一寄鯨之儀自然地方之もの見出候て注進申候は其見付候者へは浦人え被遣候鯨
之内にて浦人並に配當可遣事左候時は下として諍論有間敷事

一突鯨之儀御國中之者之儀は近々より其儘有之付而突道具爲誘造佐仕之候由聞
公儀え被召上候運上之義先拾歩一に被相定候條當分之儀は此辻を以公納可仕
通可被申渡候事

付鯨突申用意仕候初年之儀は突道具誘爲造佐入之運上一年指免候條彌諸浦と
もに鯨突候手立仕候樣に可被申渡候事以上

右之分に鯨わけ口之儀相定候條此辻を以沙汰可被申付候以上

明暦三ノ
三月二十八日

堅安房
益越中
毛隱岐
毛宮内

粟屋忠兵衛尉

右之御定を以無相違候條前書之辻ヲ以可有沙汰候以上

明暦三酉ノ
五月朔日

榎遠江

粟屋忠兵衛尉

五月二日諸臣へ屋敷配分ニ關シ地當役中ヨリ江戸へ報告に對し江戸老臣兒玉淡路ヨリ回答左ノ如シ

一其許御家賴衆中終に屋敷不被爲拜領衆中え之屋數配分之儀舊冬以來粟屋半左衛門國重又右衛門井上六兵衛其沙汰仕春中よりは可被引渡との儀に候處此御地大火事之御到來にて先々御遠慮被成候其子細は今度新儀に被遣候屋敷幷此中之居籠屋敷被引合候へは三百六拾軒余も有之候去夏於爰元房州御對談させられ候樣に只今有之屋數ならひのきれめ〳〵を御渡候は目に不立太躰も可然との儀に候其元御戻り御讃談候へは思召之外新屋敷被遣衆多人數に候就夫新町方々に出來目に立申樣に可有之候迚此節迄差延たる事候間秋に成そろ〳〵と配分被仰付御渡首尾可然と思召先作付被仰付候然時は當來年迄に普請仕候儀を再來年迄に被差延候樣にとの儀御尤に候御入國之節普請無之屋敷多はいかゝ敷候へ共いつれも又急々には內證迷惑可被仕候條外廻之垣等相當に相調候はゝ內普請は一年被差延被遣候樣に被思召候併兎角來年迄に普請相調居籠候樣にとの御意に候はゝ此節ちと目に立候とも配分可被仰付哉之通被仰聞承知仕候如仰何角と御座候內此節よりの御配分も手間入扨又普請も今來年と御座候はゝ各內證迷惑も可被仕候はゝ當秋より御配分被成今來年再來年迄に居籠候へと被仰出可然存候太躰も大きに目に立候へは如何敷候そろ〳〵御配候て居籠候はゝ內外可然存候事

五月二日　　兒淡路

毛內棍
宮內棍
毛隱岐棍
益越中棍
堅安房棍
榎遠江棍

同日諸臣乘馬飼養者へ馬喰支給に關し地當役より江戸へ伺書に對し江戸老臣より回答左の如し

一御家賴中馬之喰被遣候內郡奉行二百四十石之衆へは日別一升宛被遣候然ともゝ郡廻り仕候節は在々にて買足內證痛之樣に被及聞候はゝたゝ兩人之儀に候間よこめ衆町奉行衆並に日別二升宛被遣候樣にと思召候此儀最前爰元より被仰遣相澄たる儀に候故又被入御念被仰聞之通承知仕候事

一御家來中諸組に現高縱に付て百六十石迄は馬之喰被遣不殘馬所持候て歟多有之候近年は次第に少く罷成當分馬不持衆多有之候唯今之分に候時は來年御入國之上御氣色いかゝと思召候然とも至只今何れとも被仰出樣も難被爲成可有之候左候へは百六十石より小身衆之內にも喰被遣候はゝ瘦馬にても所持仕度と存かたも可有之樣ちと被及聞召候萬一事實にてたとひ五三人も持候はゝそれより上の分限通り之衆心入にも可相成哉に候條古高百石新高百石より上かの物きり被仰付馬持次第に日別貳升喰御意次第被遣可然と思召之由御尤に存候是は少御造佐之樣に御座候へ共御爲可然御仕置に候條先一組〳〵へ被仰渡各も被仰出之辻のことく馬所持可仕と被申出候はゝ其上可達上聞候定て無用には被成御意間敷かと存候右に相伺被仰出候上又下之迷惑とにて御理共被申出候へはいかゝに候條申儀に候事

五月二日

毛宮內樣　兒淡路
毛隱岐樣
益越中樣
堅安房樣
板遠江樣

七月二十日諸臣知行高百六拾石迄ハ馬喰支給セラルヘキ先年訓令アリシニ近年諸組乘馬減少セリ然ルニ百六拾石以下ニテモ馬喰下付アラハ飼養スヘキ希望者アルニ因リ地當役ヨリ江戸へ伺書翰左ノ如シ

追テ得御意候御家賴衆新高百六拾石通迄は馬喰可被遣候條馬所持候樣にと先年被仰出候就夫何も一通は馬所持申候然處に近年は諸組共に次第に馬少く罷成候

由承及候左候時は御入國之上御機嫌之程如何敷奉存候然は百六拾石以下之衆喰被遣候は痩馬にても所持仕度之通申もの有之由承及候付て御造佐入にて候共喰被遣馬御持せ之分限之衆心入も違馬數も出來可申哉と存候就夫右之趣日外得其意候處於其御地も御同意に思召候條與頭衆え卒度申談彌右之辻御理申出もの候は被仰伺可被遣之山繁澤二郎兵衛方下之節御書立を以被仰聞候則右之通與頭中え申聞組々え被申傳候處に井原彈正清水五郎左衛門兩與之內高百三拾石より八拾石迄之衆六人喰被爲拜領候はゝ痩馬小荷駄にても所持仕度之通申出候付立別紙に入御披見候彌馬御持せ可然と思召候は御序之到被仰伺趣被仰下次第其沙汰可申付候

一殘與々も右之分に御理申出者も可有之候ても未樣子不相極之由にて付立不被差出候此以後右同前に御理申出もの於有之は其沙汰申付趣追々可得御意候恐惶謹言

七月二十日

板遠江

兒淡路守　堅安房
益修理亮　益越中
毛隈岐　毛宮內

付立

一高百三拾石　市川九郎右衛門

但此中より馬持來候彌喰被爲拜領候は馬所持仕度之由申出候事

一高百三拾石　內藤五郎兵衛

但此中小荷駄馬持來候不苦と思召候は所持仕度之由申出候事

右兩人清水五郎左衛門組內百六拾石より內之衆喰被爲拜領候は馬所持仕度之由前書之分に御理申出候事

一高百三拾六石　杉原太郎左衛門
一同百貳拾石　山崎十兵衛
一同八拾石　本村權兵衛
一同八拾石　村田嘉兵衛

右四人井原彈正組内高百六拾石より内之衆喰被爲拜領候は新儀に痩馬にても所持仕度之由御理申出候事

七月二十日

同日諸代官本月中ニハ所轄郡へ出務スヘキヲ郡奉行ヨリ報告アルヘキ旨當職ヨリ訓示ノ次第左ノ如シ

一諸代官衆え今月中に才判所え被罷出萬事可被遂其節之通牧野五郎左衛門兒玉傳右衛門方より書狀を以可被申入之通被仰渡候尤來月え入候はゝ遠江及より御奉書被差廻被罷出候段御請を取歸候へと被仰渡候間其内無油斷可有出勤之由内意被申入候樣にと被仰渡候尤來月三日には諸代官衆え御奉書可被差出との儀に付御案書御渡五郎左傳右方に而被相調被差出候樣にと被仰渡御奉書之下書御渡候尤給領所務代衆えも不殘可被差廻との儀に付是又御奉書之案書御渡候其趣は見取時分之間萬事手子任に不被仕無緩樣可有沙汰候大坂運送米之儀も彌被入念候やうにと被仰遣候北前へは先年は大坂運送米無之に付米拵儀拵さのみ不被入御念候へ共當年分は彌淨米切米ともに念を入可有其沙汰御藏元にても究被仰付淨米切米取衆えも米拵惡敷候はゝ被申出候樣にと申觸候條可被得其意之由被仰觸候給領所務代衆えは米拵公儀大坂運送米之樣に御藏入一同には米拵被申付候へと給主之ためにても候間被仰入との儀候事

九月朔日本年七月六日ヨリ三田尻御船入工事ニ關シ御船手ヨリ四歩半ノ御役加子指出シ書立左ノ如シ

一八千八百貳拾七石九斗四升　惣高
五百石　内引石
村上河内

五百石　浦孫兵衛
五百石　村上播部
貳百四拾石　山縣善左衛門
五拾石　牧野瀨兵衛
五拾石　白井九郎左衛門
五拾石　桑原七左衛門
四拾石　兒玉半兵衛
五拾石　青木七郎兵衛
四拾石　高井九郎兵衛

以上貳千貳拾石

殘而六千八百七石九斗四升　現石

石ニ四歩半ヲ打時

加子三百六人

内

貳人　上關懸船兩艘之船付に引之

殘而三百四人

石六拾目詰にして

人數壹萬八千貳百四拾人

内

三拾四人八歩三朱四味八拂

右は金田九兵衛三組之證人役九月朔日より被仰付に付而高四拾石分に四分半ノ當リ懸六十日分之役加子百七人壹歩八朱四味を七月六日より九月二十七日迄日數八十一日之内九月九日には御普請に出し不申に付而殘日數八十日に割付一日に壹人三歩三朱九味八拂之當りを以九月朔日より同二十七日迄日數二十六日分に三十四人八歩三朱四味八拂引之

拾六人八歩壹朱四味

右は栁部長助　天下御物送り爲才料蒲苅被遣候付而高五拾石貳斗分に

四歩半ノ當りを懸六拾日分之役加子百三拾四人五歩壹朱五味九拂を七月六日より九月二十七日迄之日數八十一日の内九月九日には御普請に出し不申に付殘八十日に割付一日に一人六歩八朱壹味四拂之當りを以九月十八日より同二十七日迄日數十日分に十六人八歩壹朱四味引之拾三人三歩九朱八味

右は飯田七兵衛　天下御物送り爲才料九月十八日より浦刈え被遣候に付高四拾石分に四歩半之當りを懸六十日之役加子百七人壹歩八朱四味を七月六日より九月二十七日迄日數八十一日之内九月九日には御普請に出し不申に付殘八十日に割付一日に壹人三歩三朱九味八拂ノ當りを以九月十八日より同二十七日迄日數十日分に拾三人三歩九朱八味引之殘て人數壹萬八千百七拾五人

内

七千貳百九人

浦孫兵衛組自分共

四千五百人

村上河内組自分共

六千四百六十六人

村上掃部組自分共

以上

右之辻被成御請取可被召遣候以上

明暦三年
九月朔日　　田中市郎兵衛尉　　金田九兵衛

十一月十九日板本遠江當職在勤中諸郡御藏入當土貢藏檢査役員派出ニ關シ郡奉行ヱ檢査ノ次第訓示左ノ如シ

覺

一諸郡御藏入當御土貢爲藏究被差出候衆於先樣村一紙定納辻に引合隨分念を入

被相究候樣可被申渡候事

付米誘俵誘念を入納置候哉又はさま〳〵に有之候哉之通見届可被罷歸事

付御藏米俵數之內種籾之外に籾俵或は雜穀物なと入置申儀も於有之は其段

慥に見届可被罷歸候事

付太抵は皆濟と申出候而自然不納仕儀於有之は爲何子細にて不足之通能々

聞届可被罷戻事

一銀子方之儀地方浦方ともに納不納之所相究可被罷歸候事

一諸浮役等之儀も右同前其沙汰可被仕事右之辻を以銘々被申渡誓紙被申付郡中

可被差出候以上

朋(暦)三

霜月十九日

兒玉傳右衛門殿　榎遠江

牧野五郎左衛門殿

毛利十一代史卷之六

大田報助編次

泰巖公記六

萬治元年戊戌(七月二十三日改元)正月元日慶會西城ニテ行ハル德川實記

二日公如例御裝束ニテ登營將軍ニ謁ス

十日午牌後神田ヨリ火ヲ發シ靈岸島鐵砲洲ノ海岸ニ延燒シ新橋マテノ商家悉ク燒亡時ニ我藩增上寺防火ノ命ヲ奉セリ於是公急遽馬ヲ馳セ士卒ヲ指揮シ防拒勉勵セシム將軍水野勝左衛門ヲ使トシ慰勞セリ此時松平出羽守モ公ノ補助トシテ同寺ヘ出馬セラル

大記錄紙本正月十日江戸大火此御方三十間堀御藏屋敷御類燒トアリ

二十日去ル十九日ヨリ二十四日迄增上寺ニ於テ台德院殿二十七回忌法會ヲ修セラル公參拜

二十七日堅田安房就政ヲ膝前ニ召シ數年御國ノ政務ニ盡瘁シタルヲ慰勞シ膳具ヲ賜ヒ御扶料ノ腰刀ヲ賜フ法城寺

二十八日兒玉淡路元恒先公以來江戸在勤功勞ニ對シ知行原額現米五百石之外高千石ヲ加賜シ去暮ヨリ千石ノ物成ヲ給フ二月九日堅田安房益田修理本書

二月八日將軍歲暮ノ內書ヲ賜フ

十三日平安寺後住ハ先住遠首座ノ弟子慈玄ヘ住職ヲ命ス福原十兵衛跡職實子三九郎ニ命シ采地ヲ領セシム

十八日毛利刑部少輔元知參覲

二十日竹子姫公ノ妹鷹司房輔公室右筆ニ隨從セラレシおとよえ扶持方二人切米十二石ヲ賜ハル同姫簡女山さきへ扶持方四人切米二拾石ヲ賜ハル

二十一日夜田町ヨリ火ヲ發シ西窪土器町迄燒亡ス公增上寺ヘ出馬幕府水野勝左衛門ヲ使トシ賞慰セラル

二十八日松平越前守光通妹伊豫守忠昌女ヲ娶ルヘキ旨台命アリテ執政松平伊豆守信綱阿部豐後守忠秋是ヲ傳フ是日公ハ例式ノ祝日ニテ登營アリテ之ヲ奉受ス松平越後守松平出羽守モ例式出營ニテ同シク之ヲ拜聽ス萬記錄前畧右之趣輕キ御使者ニテ越前樣へ可被仰遣との儀ニ付突戸九郎兵衛被仰付翌晦日ニ罷立越前へ參上候事

按ニ此婚嫁ヲ結セラルヽハ過ル明暦二年四月ニ濫觴セリ此時松平越後守松平出羽守相議シテ此婚姻ヲ結ハレンコト松平信濃守ヲシテ公ニ謂ハシム公モ兩侯ノ謀ラルヽ處他意ナキヲ報答シ玉ヒケレハ同年閏四月二十九日出羽守父子越前ノ家老酒井與三左衛門ト吾家老相杜兵庫ヲ率ヒテ執政各家歷訪シテ將軍家ノ內旨ヲ窺ハンコトヲ請レシニ執政家モ承諾シテ是ヲ申稟セラレ今日台命アリシナリ

三月二日二十一日三田尻祝融ノ災アリ官船數隻并町家燒亡之旨國許ヨリ脚夫ヲ以テ報知アリ

三日上巳佳節例ノ如シ

同日毛利刑部少輔元知嫡男鶴千代後喜太郎又伊豫守元武江戸麻布日ケ窪邸ニ生ル母增山澤正利妹

十七日婚姻ノ行ルヽヤ田阪伊右衛門ヲ岩國ヘ遣シ吉川監物ヲ出府セシメ諸式總裁

タラシムルノ旨通達セシメケレハ四月十三日參府セリ

二十日吉川監物廣嘉嫡男長熊丸（後内藏助廣紀又廣岩）國ニ於テ生ル母鷲尾大納言隆景女

四月三日江戸加判毛利隱岐就朝再役（柿也年表）

按ニ萬記錄六月十八日毛利隱岐江戸着トアリ現職ニ就クトキヲ謂フカ

八日婚儀及御入國用務ニツキ繁澤二郎兵衛就充呼上セラレ江戸着就充組ハ十七日着其外大組ハ十八日十九日ニ到着セリ

十一日松平越後守光通妹千子ヘ納采ス

十五日新院疱瘡酒湯ノ式行ハレシヲ賀シ脚夫ヲ以テ小川防城大納言中根但馬榊原淡路野々山丹波青木遠江深津越中牧野佐渡ヘ御書ヲ提出セラル

二十一日千子ヲ親迎シテ合巹ノ禮ヲ行フ

是時新夫人千子ハ二十日ノ夜淺草邸（越前家ノ邸）ヲ發シテ松平出羽守ノ中邸ヘ越着ニ十一日ノ未牌吾青山邸ヘ入輿アリ從衛ハ乘輿五輛（副輿並ニ供輿ナリ）貝桶挾箱一雙長刀ノミニテ輕キ裝列ナリ越前家老永見帶刀酒井與三左衛門杉田主水隨從シ來ル儀式席ヘ召出サレ五三々ノ膳具ヲ賜フ客位ニ永見帶刀酒井與三左衛門杉田主水石谷將監主位ニ毛利刑部松平出雲中根大隅神尾備前伴食セリ新夫人ノ輿迎ハ吉川監物是ヲ勤ム尤輿請渡ノ式ハ略セラレ宍戸土佐兒玉淡路裏玄關ニテ永井酒井ヘ接遇シテ新夫人ヲ迎ヘシナリ貝桶ノ役ハ杉田主水ナリ陪臣ニハ富永治左工門來ル外ニ侍五人膳夫二人屬吏三人徒士四人中間二人小人三人又上臈ノ夫人ヨリ半下女ニテ三十七人陪從女マテ合シテ男女總員百十九人ナリ

待付ノ女郎ハ阿百合（毛利右近妹此時藩人ニテ在府ナリ）之ヲ勤ム

越後ノ夫人（光長卿ノ室秀就公ノ女）ハ十九日ノ夕ヨリ青山邸豫參シテ諸儀ヲ指揮シ玉ヒ婚禮畢リ三日マテ滯在セリ

此大禮畢リケレハ家來中五月八日ヲ以テ萩城ヘ參謁シ祝辭ヲ述ブ又使者或ハ披露文ヲ以テ江戸ヘ祝辭ヲ上リ又城下諸商人ヨリ五種五荷ヲ献ス

二十二日毛利日向守就隆來祝ス太刀馬代及ヒ新夫人ヘ縮緬十卷進セラル公面接献酬アリ

二十七日將軍西尾藤兵衛ヲ使トシ鷹捉ノ鶻五ヲ賜フ

二十九日九ッ目祝トシテ公及夫人やの邸へ（越前邸カ）始テ赴カル

五月九日北條右近稲垣若狹代トシテ證人奉行ヲ命セラレタルニ因リ關所手判下付ノ事兒玉淡路堅田安房署名ヲ以テ請求書ヲ提出シ又兩人ヨリモ判鑑ヲ收ム

十五日吉川監物廣嘉登營將軍謁見

二十一日吉川美濃守廣正内藏助ト改名ス稲葉美濃守ト同名ナルヲ以テナリ

六月三日田中二郎左衛門跡職實子九十郎ニ命ス村上河内跡職實子三郎兵衛ニ命シ船手組モ舊ノ如ク管セシム野木市允跡職養子清右衛門ヲシテ繼シム

十日又若黨又中間小者刀脇差寸法ヲ定メラル左ノ如シ（此寸法ハ幕府ヨリ訓示シタルヲ家臣ヘ發布セシモノカ）

各ヘ申渡覺

刀弐尺八寸　脇指壹尺八寸

但長脇差身之分壹尺八寸ノ外そりさや五歩壹寸迄ハ不苦候

右相書此寸より長きを指候者於有之は即時御法度に可被仰付候依品主人之儀も一廉可被仰付候通申渡候事

十六日嘉祥ノ式行ハル公長袴ニテ登營賜菓ノ式ニ參セラル列座左ノ如シ

一松平加賀守　二松平下野守　三松平大膳大夫　四上杉播磨守　五京極丹後守

六松平對馬守　七宗對馬寺

按ニ此儀式嘉祥トモ嘉定トモ書シテ其原由諸說紛然トシテ確定シカタシ試ニ諸說ノ中ニ就キ之ヲ臆測センニ仁明帝ノ御宇承和十五年豐後ノ國ヨリ白龜ヲ獻ス故ニ嘉祥ト改元アリテ宴ヲ設ケテ群臣ヲ饗シ玉フト是時官ニ命シテ吉日ヲ撰ミ六月十六日ヲ用ヒ御代ノ榮行ヿヲ祈リ御稜ナトナサシメ玉ヘリト加茂ノ長明カ四季物語ニ記シ是其濫觴ニテ後嵯峨帝イマタ潛龍ノ時支那宋ノ寧宗ノ時錄ラレタル嘉定錢十六文ヲ用ヒテ此日ノ饌具ヲ設ケサセ玉ヒシ事アリ武家ニテ此式ヲ用ヒラレシハ林羅山ノ說ニ室町將軍ノ時六月納凉ノ遊ヒニ揚弓ヲ射テ賭トシテ負タルモノ嘉定錢十六文ヲ出シテ食物ヲ買ヒテ勝タル者ヲ饗セシメシヨリ始レリ德川家ニテモ東照宮ノ時ヨリ足利家ノ舊式ヲ準據トシテ群臣ヲ饗應シ來ラレ

シナルヘシ然ルニ仁明帝以來ノ國史尙延喜式江家次第公事根源年中行事類ノ諸書ニ見當ラス是ヲ疑フ諸說モ多ケレトモ一條兼冬公ノ著セル世諺問答蜷川親俊記禁中年中行事略實記等ニモ問々散見スレハ歷代絕テ行ハセラレサルヿニモ固ヨリコレ無ク只大禮式ニアラサレハ或ハ行ヒ停ミテ今日迄成來レルモノカト思ハル前條ノ諸說其他ノ雜錄スル大旨ヲ玩味スレハイツレモ世運ノ榮盛ヲ祝セラル、本意ニテ六月ヲ用ヒラル、ハ大祓ノ時節ニ因リテ行ヒシモノカ十六ノ數ヲ用ルハ原ト十六日ノ吉例ニ遵用セラル、コトト覺ユサレハ文字ハ嘉祥ノ字ヲ用フヘキ筈ナリ嘉定ハ其字音ノ似タル故ニ采錢ヲ用ヒラレシヨリ根底シ來ルナルヘシ然ルニ祥ト定トハ俗音ハ似タレトモ音響ハ大ニ逆ヒ通スヘキモノニアラス杜撰ト云ヘシ此祝式幕府ニテハ御菓子ヲ（十六色ノ內ト云）平板ニテ列侯拜受アリ侍從以上ハ將軍家御着座ノ上向席下段ヘ列侯着座拜受アリ其以下ハ着座無之置付ノ菓子ヲ頂戴ト見ヘタリ吾毛利家ニテハ御家督後直ニ侍從任官ノ例ナレハ初度ノ參席ニハ一應御親書ヲ進シテ附箋ノ允可ヲ得テ行ハル、コトト見ヘタリ二度以後ハ年々無違恒例ニテ參席アラセラル、コトナリ

十八日毛利隱岐就賴江戸着（柿並年表四月三日ヨリ江戸加判毛利隱岐就賴再役同六月迄又江戸御留守居毛利隱岐就賴トアリ）

二十一日將軍閣老阿部豐後守ヲ使トシ公ニ始メテ歸國ノ暇ヲ允サレ袷五十銀子五百枚ヲ賜フ公登城拜謝更ニ馬一匹ヲ賜フ公近日發程セントス夫人及親姻ノ人々ヘ贈物有差

一銀子三十枚　一拜領袷三重
夫人ヘ
一銀十枚　一拜領袷三重
越後ノ夫人ヘ
一拜領袷一重　矢野夫人ヘ
一同　一重　慶壽院
一同　一重　イタテ夫人ヘ
一大判　五枚　右近ヘ

右ノ外幕府諸官人幷内外ノ家臣及婦女等亦贈物アリ

七月三日公近日國ニ就ヲ以テ江戸留守用方乃美五左衛門ヲ召シ黒印ノ令條ヲ授ク

今度留守中萬用所其方へ申付候心遣專一候諸手子之者面々之役無緩遂其節之樣に手堅可申付候抽其役儀を辛勞仕者於有之は依品褒美をも可加之若如在なる者有之は其方申所聞屆糺明候上曲事可申付者也

戌ノ七月三日

乃美五左衛門とのへ

日不詳公啓行ニ先チ士卒ヲ出發セシム又數十條ノ令ヲ發シ陪從ノ士卒ヲ誡メラル

三日内藤又右衛門跡職實子長左衛門ニ生多八郎右衛門跡職養子市右衛門ニ命シ采地ヲ領セシム横山長大夫死去嗣子ナキニ因リ知行沒收

同日公幼稚ノ時ヨリ御部屋へ附屬セラレ勤仕特別盡瘁セシモノ秩祿加賜左ノ如シ

加增高百石宛

但持かゝりの御ふち方七人

渡邊十右衛門

御切錢三百五拾目を高七拾石ニ直シ被遣引合高百七拾石宛

田阪伊右衛門

兼重新右衛門

内藤半右衛門

松田權左衛門

前田茂右衛門

同高八拾石

但持かゝりの御ふち方五人御切錢三百拾匁御切米拾貳石を高八拾四石九斗ニ直シ被遣引合高百六拾四石九斗

島尾甚右衛門

同高八拾石

但本地百拾五石引合百九拾五石

大和又四郎

同高八拾石宛

但持かゝり御ふち方五人

兒玉三之介

御切錢三百六拾五匁を高六拾三石四斗ニ直シ被遣

吉田半四郎

小濱彌平次

引合高百四拾三石四斗宛　乃美與右衛門
同高八拾石宛　河内六郎右衛門
但持かゝり御ふち方五人　山縣武兵衛
御切米三百三十五匁を高　南方平右衛門
六十石になをし被遣引　岩佐三彌
合高百四十石宛　高須平七
同高八十石宛　松田甚五郎
但持かゝり御ふち方五人　國司忠兵衛
御切錢二百五十目を高五十石に直し被遣引合高百三十石宛　八谷五兵衛
同高八十石宛　三戸平左衛門　李家九一郎
但本地百六十石引合　杉山太兵衛

高二百四十石宛　佐世與三左衛門
同高八十石　河内五郎右衛門
但本地百二十石引合高二百石　熊谷太郎右衛門
同高八十石宛　内藤五郎右衛門
但本地八十石引合　小笠原彌右衛門
高百六十石宛　上山七左衛門
同高八十石　飯田六郎兵衛
但本地七拾石七斗引合高百五十石七斗　笠井庄左衛門
同高八十石
但本地七十石引合高百五十石
同高八十石
但本地六拾四石引合高百四拾四石
同高八拾石

但本地五拾石引合高百三拾石　南方又八郎
同高三拾石
但本地百六拾石引合高百九拾石　糟屋權六
同高五拾石
但持かゝりおふち方五人御切錢六百目を高九拾石七斗に直し被遣引合高百四十石七斗　雲谷等禪
同高九拾石
但持かゝり御ふち方五人御切錢三百五拾匁を高七拾石に直し被遣引合高百六拾石　內藤十郎兵衛
同高五拾石宛
但持かゝり御ふち方五人　小笠原仁左衛門
御切錢二百五十目を高五十石ニ直シ被遣引合高百石宛　國司權右衛門
同高五拾石宛

但本地五拾石引合高百石宛　坪井七左衛門
同高五拾石
但持かゝり御ふち方七人御切錢三百五十目を高七拾石に直し被遣引合高百二十石　津田梅林
同高三十石　石川勝兵衛
但本地九拾石引合高百二十石　原田甚右衛門
十日毛利伯耆娘（知行高六千石）阿曾沼忠二郎女ニ（知行高二千五百石）毛利隱岐娘（知行高四千石）清水五郎左衛門子虎之介女ニ縁職ノコト五月二十二日申請セシニ今日閣老ヨリ許可ノ命アリ
十三日板本遠江就時擬ニ御國當職ヲ命セラレ伺狀ヲ提出セシニ公肩書ヲ以テ指令左ノ如シ
此段安房守才判之時のごとく可申付事
一御國中御仕置之儀近年堅田安房守申付候所無相違樣に可遂其節と奉存候條左

様被聞召可被下候事

此段其方相計差當る時々勝手能様に沙汰可仕事

付前々可然御仕置にても年月過去今日は御不勝手に罷成儀も可有御座候

さ候時は今日之御爲能様に其沙汰可仕と奉存候事

此段聞届候左様も候はゝ其方へ可相尋事

一御仕置之儀に付て私手前の儀悪様に被聞召上候節は其時々に被成御尋可被下

候御不審に被思召御尋をも不被成様に御坐候へは一日にても御役所勤難仕奉

存候條内々左様被聞召上可被下事

此段聞届儀於有之は可相尋事

一萬事御爲之儀心之及疎略奉存間敷覺悟に御座候併御兩國大段へ御用之儀に御

座候故心底不存當誤多可有御座候と奉存候左之儀被聞召上候はゝ被成御尋候

上尖に可申上候條被聞召分可被下候事

此段無緩遂其節爲に相成者之儀於遂言上は其方申所聞届心を付可遣事

一私へ被爲付置候衆中之内抽公役御爲を專に所勤仕衆之分は尖に可申上候條被

加御意依品御心をも付被遣候様にと奉存候尤御爲をわきへなし私之贔負を以

能様に申上儀毛頭御座間敷事

此段聞届候尤檢儀之上其方可爲校丁次第事

一於御國中侍町人百姓によらす其役々を勤め抽公役者於有之は時々少宛之儀は

私校丁を以御褒美等遣し追て其趣可致言上之限有之儀は各申談前廉相伺候上

其沙汰可仕事

以上

右之前被成御寛御意之旨被遊御肩書被下候様に御取成奉願候以上

西ノ十月二十一日　　板本遠江守

兒玉淡路守殿

益田修理亮殿

右肩書之辻を以可申付候以上

戌ノ七月十三日　　御黒印

板本遠江守とのへ

十九日公發途の前閣老ニ窺ハル、書立及指令左ノ如シ

覺

一增上寺火ノ御番只今迄奉所勤事

一今度京都立寄鷹司殿見舞申度奉存候此段如何可有御座哉之事

一禁中樣へ御禮儀可申上哉之事

一在國之內國中きりしたんの改可申付候此已前は五人組之沙汰にて相改候此外に何とそ相究候樣子も可有御座哉之事

一初て入國之儀に御座候條致國廻境目をも見可申と奉存候事

右之樣子御差圖次第に仕度奉存奉得御內意候以上

閣老より指令

○增上寺火之御番之儀今度御暇被進候てよりは被召上候間其心得候樣にとの儀御座候事

○京都へ御立寄之儀は被得上意儀候間御伺にて重て可被仰聞候由候左候て追て被仰渡候は被得上意候へは京都へ立寄鷹司殿へ可有對面之旨被仰出候由福間彥右衞門被召寄被仰渡候事

○禁中御禮之儀は唯今迄其例無之候御延引にて尤に被思召候由被仰候事

○きりしたん究之儀は別には有之間敷候間今度も先年之分に五人組に御改可然之由被仰候事

○御國廻之儀は國本へ御暇被下被遣候儀は國中を見屆候て仕置被仕候樣にとの儀候間いかにも御心靜に御國廻りにて可然之由被仰候事

以上

二十九日公江戸ヲ發シ歸國ノ途ニ就ク

八月十三日大村因幡守純長カ封內ニテ天主教ノ徒六百三人逃捕シ或ハ大辟或ハ囚獄セシムル旨長崎奉行ヨリ注進ス

是月邪教禁遏ノ高札ヲ建ラルソノ文ハ天主教ノ事累年禁セラルトイヘ𪜈イヨ〳〵ヲコタリナク考察スヘキ旨仰出サレヌモシ不審ナルモノアラハ訴ヘ出ヘシコレヨリサキハ伴天連ノ訴人ニ銀二百枚イルマンニ百枚褒美賜ハリシカド今ヨリ後ハ伴天連ニ三百枚イルマンニ二百枚同宿幷ニソノ門徒ヲ訴ヘ出シニハ五十枚又三十枚ソノサマニヨリ賜ルヘシモシ隱シヲキ他ヨリ顯ハレ𪜈バソノ他ノ五人組マテ曲事ニ行ハルヘシトナリ

十五日公京師ニ入リ應司家ヲ訪問ス

十八日公大坂ヨリ御乘船

九月朔日公初テ御入國ニツキ諸臣衣類ノ件地當役ヨリ江戸隨從ノ老臣ヘ伺書ノ回報左ノ如シ

追テ得御意候今度御入國ニ付御家來乘幷又内之者衣類等如先規ト被仰出候然ハ此度御供之面々其外足輕又内之者迄道中之衣類羽織等それ〳〵に應し絹布唐物ひのつむき之類ひ有之候御國内之儀は右之衣類も用捨可有之哉と沙汰仕見申候へ共俄に仕替も成苦敷事候條御入城迄は道中着かゝりの衣類いつれも被差免御入城翌日よりは堅御法度被仰付可然と申儀候就夫相窺候上繁二郎兵兒三郎右山治少えも右之通申渡候其地より御迎等被罷出乘之儀は右之並とは各別之事候條面々之衣類足輕又内にいたるまて御法度之辻相守御定之外之衣類着無之樣に堅可被仰渡候恐惶謹言

九月朔日

兒淡路　益修理　堅安房

毛内右　宮内右　益越中右　榎遠江右

同日公三田尻御着艦公亭ヘ滯在セラル

三日公三田尻ヲ發シ山口ニ至ル

四日戌牌公萩御入城

今回ハ公初テ御歸國ナレハ諸般儀式尤繁多ナリ其一二ヲ摘舉センニ大阪ヘ船手三組ノ頭（晉藩ノ舟師ニテ三田尻港ニ居住スル醫術士ナリ）出迎又佐々並驛ヘ吉川監物益田越中出迎其他迎待從衛ノ諸臣枚舉ニ遑アラス

公御入國萬般ノ準備ハ六月二十一日二十二日江戸老臣ヨリ國許老臣ヘノ報告書ニ詳ナリ（無盡集卷之八）

一御入城之時御座之間御飾幷御座配

北

（御座床小笠原彌右衛門飾之）

御太刀（此御太刀ハ塀ニタテスケ候事）

御長刀

御鎧甲

御具足

御六具鎧甲

上

置鯉

十八畳敷

吉川監物殿

吉川内藏助殿

南

東

西

（御膳部右衛門鎧之則左衛門鎧屋）

（御膳部右衛門鎧之則左衛門鎧屋）

瓶子折

葉子折

銚子折

六角折

提

葉子折

瓶子折

餅折

餅折

但御床之御具足御甲ハ輝元樣高麗へも被爲召候御具足秀就樣入國之時も御床に被爲飾に付如此御甲は元就樣被爲召候御甲也御太刀は輝元樣高麗陣に御帶被成候貞秀之御太刀也禁中御重代之獅子王と申御劍と同作にて無類之由本阿彌申候御重代之故御飾に出申候

御打刀元就樣御打太刀也度々國家御退治之御打刀銘ハ吉光吉宗トモアリ

御祝之次第右之御座配にて御三献以後七五三三ッ點心上り候事

付御規式之已後御留守居毛利宮内益田越中國司備後職役板本遠江御城代宍戸

丹後被召出御盃被遣候其以後御添膳本三二三二向御引手七御肴二種御菓子三種之御膳上り申候事

就封ノ時御腰物御脇指京都及御親族へ贈與吉川家及江戸國許老臣へ下付又吉川家及老臣ヨリ進献之御腰物御脇指書立無盡集卷八ニ載ス

五日御入城後初行歩ニツキ毛利宮内ノ家ニ至リ熨斗昆布ヲ取リ大照院天樹院洞春寺ニ詣シ香資ヲ奠ス

九日重陽節ニツキ帳簿ヲ設ケ諸臣ノ拜禮ヲ受ク

十三日吉利支丹宗門究ニ關シ諸臣及郡市民衆ニ依リ五人組ニシテ誓書提出スヘキヲ頒布セリ慶壽院八月十七日卒去ノ訃到ル（按ニ越前家カ其續相後考）

二十一日公大廣間ニ出座シ謁ヲ賜フ一門同ノ嫡子益田越中與頭寄組同ノ嫡子福原相摸黒澤丹宮南方木工福間彦右衛門口羽又兵衛惣領共ノ御奏者御書院御小性御目付御旗奉行御鑓奉行御母衣ノ衆御使番御手廻物頭大組物頭大組八組（但江戸御番手ノ次第）御船手三組（但隠居惣領共）役者ニ至ル

御在國中萬覺書ニ一門幷益田福原以下御禮儀ノ差定アリ二十一日一門益越中迄謁見ノトキ御吸物ニテ御盃ヲ賜ル二十二日謁見ノ諸臣及ヒ二十三日寺社家ヘ御盃ヲ賜ル等詳細ノ記乘アリ之ヲ略ス

二十六日公城内五層樓ニ上ル（世ニ五層樓ヲ稱シ天主ト爲ス往昔ハ未タ其名ヲ聞ス織田氏安土城ヲ築キ層樓ヲ起シ天主ト稱ス其後ヲ城主ト書ス諸説紛々皆ナ五層樓ヲ云ナリ）皆ナ此擧アリ或ハ殿主ト書シ或ハ天主ト書ス諸説紛々皆ナ五層樓ヲ云ナリ）毛利宮内益田修理堅田安房兒玉淡路兒玉三郎右衛門繁澤二郎兵衛之ニ從フ層樓ニテ公熨斗昆布ヲ取リ宮内以下順次之ヲ賜ハル其儀既ニ畢リ山頂ニ在ル要害ニ攀ツ公樓櫓ニテ熨斗昆布ヲ取リ陪從ヘ賜ル前ニ同シ既ニシテ禮酒ヲ設ク伴食ニ毛利宮内城代役宍戸丹後ヲ召シ盃ヲ賜フ丹後献スルニ腰刀ヲ以テス又要害番波多野六兵衛丹後附屬石津甚右衛門祖式七郡兵衛普請奉行井上六郎右衛門ヲ召シ酒盃ヲ命ス（襲封初テ國ニ就キ天守要害ヲ巡覽スルキ此式行レシヤ此時ヲ以テ櫓奥トナスカ詳ナラス）ハ入國ノ先規ナリ旁就公初テ國入ノトキ

同日夜大書院ニ於テ吉川内藏助父子宍戸土佐毛利伯耆毛利石見毛利織部益田越中益田修理堅田安房兒玉三郎右衛門毛利主膳毛利宮内國司備後兒玉淡路板本遠江繁

澤二郎兵衛宍戸丹後ヲ召シ享膳ヲ賜フ（享膳ニ汁七菜割鮑ノ式アリ又謡曲ヲ奏セシム）

二十八日公吉川内藏助ノ邸宅ニ抵ル太刀大馬代樽一荷二種ヲ賜フ吉川父子公ヲ饗應シ諸囃子三曲ヲ奏ス

十一月九日ヨリ閏十二月二十六日迄ノ間公吉川監物大照院宍戸土佐洞泰寺滿願寺毛利主膳毛利伯耆天樹院周慶寺毛利丹波毛利宮内益田越中福原左近ノ家ニ臨ミ饗應ヲ受ケラレ賜物及献物等詳細ノ記錄アリ繁文ナルヲ以テ錄セス

十月朔日公御初入國ニツキ禮謝トシテ福原左近ヲ出府セシム左近今日登城將軍ヘ拜謁羅紗五間二種一荷ヲ進献セラル將軍左近ヘ小袖三羽織一ヲ賜フ

三日城内ニ諸舞場ヲ開キ衆庶ヲ縱觀セシム初テ入國ヲ賀スルナリ

十一日公管内巡視トシテ今日萩城ヲ發シ阿武郡石見境ヲ巡リ都濃郡鹿野ヨリ山代ヲ經テ岩國ニ至リ三田尻巡行小郡船木吉田ヨリ赤間關ニ抵リ川棚阿川三隅ヲ經テ

同二十八日還城

是時途中行列及三支封岩國并所在老臣及其家臣等ヘ賜品等詳細記錄アリ

日不詳柿並年表榎本遠江殿御役中諸町人木履被差免候無左候ヲハ老拙或ハ病人幼少之者日和惡敷時難儀商ノ支リニ相成迷惑仕候通町奉行井上六兵衛ヨリ願出被差免雖然不作法無之樣ニト被仰出トアリ

十四日益田玄蕃（初越中守）元堯入道無庵死去年六十四

十一月五日毛利刑部少輔元知嫡男鶴千代元武以外緣謁將軍大夫人

十六日竹子姫ヘ奉仕ノ上菰於サト暇ヲ賜リ代トシテ於キヤク雇用ニ因リ三人扶持切米十六石ヲ支給ス

二十九日輝元公妾東泰院殿於萩死去（柿並年表長陽年代記十月二十九日トアリ）

十二月四日粟屋瀨兵衛死去跡職實子長吉ニ佐々木次左衛門跡職實子彌八郎ニ和智二郎左衛門跡職實子十兵衛ニ眞鍋太郎左衛門跡職實子長兵衛ニ神村喜兵衛跡職實子半兵衛ニ作間神左衛門跡職實子權右衛門ニ津田良意跡職養子良固ニ神保一郎右衛門跡職實子市三郎ニ命シ采地ヲ領セシム

同日竹子姫ヘ（廳司房輔公室）進セラレタル高二千石ニテハ年中内外ノ費用不足ヲ生スルニ

因リ公江戸上下土宜トシテ一ケ年銀二百枚宛贈進セラルヘキヲ神谷勝右衛門ヘ通報セリ又竹子姫ヘ奉仕上臈一人闕員ニツキ於ルヨ雇用二人扶持切米十二石ヲ給ス

十三日來正月夫人分娩ノ期ニ臨ミ蕃目ノ祈禱ヲ修セラルヽ爲メ椙杜左門小笠原仁左衛門ヲ出府セシム

三十日伊勢内宮炎上

閏十二月二日幕府諸驛ノ高札ヲ改建ス（文言舊ニ依ル）

三日幕府萬石以上ノ家人ヲ評定所ニ召シテ令アリ

一去年當年在々所々耕作損亡之所有之其上材木山出ニ付テ米令費之間酒造之義江戸京都大阪奈良堺其外銘酒之所々又諸國在々所々ニ至ル迄例年之半分當年來年ハ可造之幷新規之酒屋一切可令停止之若於致違背ハ其所ノ給人御代官可爲落度自然密々多ク造ル類アラハ訴人ニ出ヅベシ御褒美被下之其上仇ヲナサヾル樣ニ可被仰付之勿論酒屋ハ可被行罪科事

一耕作損毛之所々百姓可爲困究之間此上不草臥樣ニ入念仕置可有之事

一從先年如被仰出土民ニ對シ非義スベカラズ若又作毛不損毛亡之處申掠年貢金難澁ハ可爲曲事事

一在々所々雖御鷹場年内ヨリカヽシヲ致シ麥ヲマカセ可申事

一鹿猪追ハセ可申勿論取來リ候所ハ猶以可爲其通事

右之條々急度可被申付之者也

右之寫江戸ヨリ到達ニツキ諸與頭郡奉行諸代官町奉行ニ頒布セリ

十五日外科醫永田意トヲ徵用シ十人扶持切米五拾石ヲ賜フ

二十日來年正月夫人分娩祝賀ノ時酌加役命セラルヘキ爲メ大與ノ内福原長右衛門有地平右衛門出府セシム

二十一日煤掃ノ式アリ公椙杜隼人ノ宅ニ臨訪セリ

按忠正公御初入國比ノ例ヲ見ルニ掃塵ノ式舊ハ江戸當役ノ宅ニ避ルトアリ是時江戸當役ハ兒玉淡路ナルヲ以テイマタ一定セサルモノカ

二十二日山口大火奉公人屋敷三十八軒寺三ケ寺町家三百壹軒

二十五日高須三郎兵衛跡職三男半作ニ吉原九郎左衛門跡職實子五郎兵衛ニ山崎十兵衛跡職實子太郎左衛門ニ命シ采地ヲ領セシム岡與兵衛跡職實子半介幼少ニツキ知行六拾四石之内九石没收五拾五石牧野金八郎死去生前末子助之進ヲ養子ニ出願セシニ幼少ニ付キ知行五百石之内百五拾石没收三百五拾石ヲ領セシム

二十八日兒玉藤右衛門御藏御用命セラレ功勞ニ對シ於于時米三拾俵ヲ賜フ國司隼人ヲ江戸今年御用方都合ト爲ス桂清右衛門ニ矢倉方首頭ヲ命ス飯田道億來正月夫人臨月ニツキ國元ヨリ出府セシム

日不詳是ヨリ先キ京都西本願寺ト與正寺ト葛藤ヲ生シ紛糾數月幕府井伊掃部頭ヲシテ論解セシメ遂ニ與正寺ヲ越後國ニ蟄居セシム然ルニ與正寺京大阪等ノ教職ヲ停メラレ活計困迫哀訴頻ナリ幕府マタ松平出羽守ヲシテ之ヲ商略セシム羽州曰與正寺ハ毛利氏ノ姻族也今大膳大夫弱齡故ヲ以テ我ヲシテ裁決ニ預ラシム也然則救助亦他ニ求ムルノ道アランヤト先銀五十枚米五十石ヲ出シ之ニ救與セリ於是我老亦協議シ銀百五拾枚米百五十石ヲ出シ併テ一歲ノ諸費ニ充ル者數年茲ニ至テ幕府兩門ノ譴責ヲ放免セリ與正寺越後ヨリ還リ大阪ノ御堂ニ移居ス然レドモ家資蕩盡生計困切ナルヲ以テ更ニ今來年ノ救助ヲ懇請ス於是マタ今年翌年ニ至ルマテ兩家ヨリ銀米ヲ支辨如舊（先年天樹公實尸左衛門元秀ノ女ヲ養テ金吾秀秋ニ嫁セシム慶長五年實尸氏ノ女毛利家ヘ入歸セリ後之ヲ與正寺昭玄ヘ再嫁セシム是其姻族メル所以ナリ）

二十九日公使臣ヲ京師ニ遣シ勅修寺ノ執奏ヲ以テ歲杪ヲ賀ス即日勅答女房ノ奉書ヲ賜フ左ノ如シ

覺しめし候よし　　披露申て候へは
なかとのしゝうより　　おもしろく
暮の御祝儀として

こゝろえて　　御太刀馬代
申　　しろかね十枚
此よし御心へ候て　　しん上候
つたへられ候へ

上書なり
仰萬治元後十二廿九　但一重かみ　　くわんしゆ寺
白かね五枚　　とのへ

長門の侍從より　御太刀
年のはしめ　馬代
御しう義として

しん上候ハろう
申て候へは
おもしろく覺召し候よし
よく〳〵心得候て申〳〵

くわんしゆ寺大納言
とのへ

此よし白候て
つたへられ候へと

法皇御萬治二正十五

禁裏仙洞爲歳暮之御祝儀如目錄披露申候處に則女房奉書如此被仰出候猶下官より相心得申入旨候隨て我等所へ御太刀一腰馬代銀子壹枚被掛御意過分に存候何も追て可得御意候條不能具候恐々謹言

後十二月二十九日

松平大膳大夫殿　勅修寺大納言

備考應仁ノ後チ爭亂相踵キ皇室式微ニシテ朝夕ノ供御屢ハ乏絶ヲ告ク正親町帝踐祚スト雖トモ即位ノ大禮未タ其儀ヲ行フ有ラス洞春公深ク此ニ慨シ永祿三年庚申正月其費ヲ献ス是ニ於テ帝之ヲ嘉納シ其例即行ハル詔書ヲ賜ヒ其忠勤ヲ優賞シ女房奉書ヲ下シ洞春公ヲ陸奥守ニ常榮公ヲ大膳大夫ト爲シ且ツ菊桐ノ章ヲ賜フ爾來毎歳恒例ト爲リ歳ノ首尾其他嘉禮凶儀凡テ大事アレハ使ヲ遣ハシ物ヲ献ス即日勅答女房奉書ヲ賜フ蓋シ毛利氏ノ特典ナリ

本記拾遺附錄

正月二十日板本遠江當職ト爲リ諸郡萬般ノ訓令近年堅田安房ヨリ傳令ニ異ナキナキヲ遠江ヨリ郡奉行ヘ授クル條書左ノ如シ

覺

一天下より度々被仰出御法度之次第幷從殿樣之御掟之旨下々式迄謹て相守候樣に時々可被申渡事

一きりしたん宗門御法度之儀度々雖被仰出儀候猶以撰作不怠樣に其沙汰被仕事

庵復仇ノ始末ヲ自首シ罪ヲ待ツ今回ノ行動暴舉ニ非ザルヲ以テ二月二十八日公吉之允ヲ召シ書院ニ於テ謁ヲ賜フ

二十日京大坂ノ財務ニ關シ交渉協議處理スヘキヲ江戸當役ヨリ地當役ヘ照會書翰左ノ如シ

堅房州上之節一ツ書を以被仰付之内京大坂御用方之儀大躰は江戸より萬事申付候然共依品御國よりも沙汰被仰付儀有之候就中大坂之儀は御兩國御物成御米紙賣拂仰付一ヶ年に銀子二千貫目之内外取なやみ請拂仕所に候條御役人諸手子等迄被入御念御ゑらひ候て被仰付儀候自然萬御差引之儀此地には其元より可有御沙汰と存其元には江戸より差引可有之と思召互にうち過申樣に候はゝ樣子により御公損參儀も可有之候條右兩所之儀は萬事一列に江戸より差引申付候樣に可然候乍去何々之廉は御國より沙汰被仰付たるか能と存寄儀には沙汰仕可申進之通被仰聞尤存候か樣之儀はとくと相談仕候はては難定儀に御座候條御入國之上申談可相定候其内之儀は先此中之分に時々存寄候所互に御談合可申候

一此以後大段之御物入廉々數多差向たる儀共候其元御仕出之儀如何共可有之哉と御心遣に思召候由尤に存候差寄御與被入せ候時之御仕與御入國被遊候時之御造佐入旁大段之御物入たるへく候兼々沙汰仕少充之儀にてもはし〳〵御勘略候樣に互に心遣可仕候通無餘儀存候去春之大火事以後萬御物入つよく其上諸事之直段高直に候故月別之御入目大分入增今春も大火事にて物每彌高直に相成笑止之儀共に候此上なから隨分當分不爲入儀は緩之儀にても差延置候樣にと存候其元にも左樣可被成御心得候恐惶謹言

二月二十日　　兒淡路
　　益修理

板遠江守

三月二十三日御國中之升ニ關シ板本遠江ヨリ萩町奉行ヘ訓示左ノ如シ

御國中之升去年被相改候間當町中有之古升之分大小共に無殘取上ヶ御藏本へ可被差上候在々えも此段御代官衆申渡候恐々謹言

肝要に候事

一諸郡萬事之被申付樣を手堅房州より被申渡候辻今以無相違儀候條旁以被得其意諸事無油斷心遣可被仕之通諸所務代兼え能々可被申渡事

付作付之事

付土手川よけ堤其外在々修補之事

付米誘俵誘念を入被申付儀候條種籾より撰候樣に手堅可被申付事

一諸郡在々百姓町人によらす夫々之勤役を萬事無作法に無之樣に可被申付事

付百姓町人によらす諸事守御掟之旨其上御爲之儀付て抽御馳走申上者於有之は其趣此方え可被申聞候依品御褒美をも可被遣事

一在々諸拂方延米取遣并普請飯米渡口なと之儀に付庄屋畔頭小百姓間出入出來申儀有之も此段は代官兼地下向之諸沙汰大形に被心得候兼存口に有之樣に承及候條隨分無油斷心遣被仕萬事有躰に其沙汰候樣に手子之者并庄屋畔頭小百姓に至迄能々可被申聞候事

以上

右之品々事葛たる儀候得共彌以諸代官兼心遣爲無油斷有增之所如此候條此辻を以銘々可被申渡候以上

明暦四
正月二十日

牧野五郎左衛門殿　　板遠江
兒玉傳右衛門殿

二月十五日萩町法花寺前ニテ渡邊吉之允松本燒物師山村松庵ヲ殺害ス前年吉之允父渡邊四郎右衛門ヲ松庵故殺セシヲ以テ復仇セシナリ曩ニ四郎右衛門弟宗庵出家シテ關東ニ在リ四郎右衛門殺サレシヲ聞キ還俗シテ歸國セリ吉之允宗庵兩人シテ此擧ニ及フ（大記錄卷三十地當役ヨリ江戸當役ヘ通牒書輪ニ詳ナリ）

松庵前年渡邊四郎右衛門ヲ女敵ト號シ故殺セシモ異國人ナレハ其罪ヲ赦サレシガ今回ノ變ニ逢ニ雖フト雖モ萬治二年二月息平四郎ヘ跡職ヲ命セラル吉之允宗

庵復仇ノ始末ヲ自首シ罪ヲ待ッ今回ノ行動暴舉ニ非ザルヲ以テ二月二十八日公吉之允ヲ召シ書院ニ於テ謁ヲ賜フ

二十日京大坂ノ財務ニ關シ交渉協議處理スヘキヲ江戸當役ヨリ地當役ヘ照會書翰左ノ如シ

堅房州上之節一ッ書を以被仰付之内京大坂御用方之儀大躰は江戸より萬事申付候然共依品御國よりも沙汰被仰付儀有之候就中大坂之儀は御兩國御物成御米紙賣拂仰付一ヶ年に銀子二千貫目之内外取なやみ請拂仕所に候條御役人諸手子等迄被入御念御ゐらひ候て被仰付儀候自然萬御差引之儀此地には其元より可有御沙汰と存其元には江戸より差引可有之と思召互にうち過申樣に候はゝ樣子により御公損參儀も可有之候條右兩所之儀は萬事一列に江戸より差引申付候樣に可然候乍去何々之廉は御國より沙汰被仰付たるか能と存寄儀には沙汰仕可申進之通被仰聞尤存候か樣之儀はとくと相談仕候はては難定儀に御座候條御入國之上申談可相定候其内之儀は先此中之分に時々存寄候所互に御談合可申候

一此以後大段之御物入廉々數多差向たる儀共候其元御仕出之儀如何共可有之哉と御心遣に思召候由尤に存候差寄御與被入せ候時之御仕與御入國被遊候時之御造佐入旁大段之御物入たるへく候兼々沙汰仕少充之儀にてもはし〳〵御勘略候樣に互に心遣可仕候通無餘儀存候去春之大火事以後萬御物入つよく其上諸事之直段高直に候故月別之御入目大分入增今春も大火事にて物每彌高直に相成笑止之儀共に候此上なから隨分當分不爲入儀は緩之儀にても差延置候樣にと存候其元にも左樣可被成御心得候恐惶謹言

二月二十日

兒淡路
益修理

板遠江樣

三月二十三日御國中之升ニ關シ板本遠江ヨリ萩町來行ヘ訓示左ノ如シ

御國中之升去年被相改候間當町中有之古升之分大小共に無殘取上ヶ御藏本へ可被差上候在々えも此段御代官衆申渡候恐々謹言

明暦四戌
三月二十三日　井上六兵衛殿　板遠江
高須八郎左衛門殿

五月三日屋敷配當所田畠諸屋敷道成溝成幷ニ殘地共現間檢査ヲ遂ケ帳簿ト本石ヲ現間ニ割付惣括一紙屋敷割方役員檢地方役員ヨリ屋敷奉行ヘ提出スル目錄左ノ如シ

屋敷御配當所田畠惣都合目錄

元畝三拾九町二反八畝拾歩
一田畠現畝四拾三町七反八畝
米九百三拾三石五斗五升一合五夕
田數二拾八町三畝七歩半
六百八拾九石七斗七升六合五夕
内
畠數拾五町七反四畝弐拾弐歩半弐百四拾三石七斗七升五合
内
九拾弐石八斗八升一合　田方
右各居籠屋敷明暦三年より御物成御除分
拾六石三斗四升三合
内
七拾六石五斗三升八合　畠方
四石九斗壹升八合五夕
右居籠屋敷不足分足石明暦四年より御物成御除之分
弐石六斗五升三合五夕　田方
内
弐石弐斗六升五合　畠方
弐拾弐石九斗六升四合

右古屋敷不足分之足石明暦四年より御物成御除之分

拾三石九升四合　田方

内

九石八斗七升　畠方

三百八拾五石一斗五升貳合

右新屋敷成明暦四年より御物成御除之分

三百拾三石六斗三合　田方

内

七拾壹石五斗四升九合　畠方

三拾九石壹斗五升三合

右諸所道成明暦四年より御物成御除之分

三拾五石四斗七升一合　田方

内

三石六斗八升貳合　畠方

四石九斗五升貳合

右諸所新溝成明暦四年より御物成御除分

但田方貳段拾歩

以上米五百五拾石貳升五勺

三百八拾六石壹斗壹升六合五夕　田方

内

百六拾三石九斗四合　畠方

右引ヶ石辻之分

殘三百八拾三石五斗三升壹合

三百三石六斗六升　田方

内

七拾九石八斗七升壹合　畠方

内

五拾石壹斗七升四合

右各買屋敷代銀不納之内御年貢被相調分

三拾六石壹斗四升六合　田方

内
拾四石貳升八合　畠方
此外畠一段米貳石八斗三升八合
原又兵衛買屋敷之分林權右衛門上ヶ屋敷ニ付て根石無之故最前村上又右衛門方え拜領之時引渡候古石を以書付各買屋敷帳に書加へ有之
三拾七石六升四合
右各定預り御年貢
内
拾四石九斗四升三合　田方
貳拾貳石壹斗貳升壹合　畠方
貳百九拾六石貳斗九升三合
右百姓地後々年御帳面辻
内
貳百五拾貳石五斗七升壹合　田方
四拾三石七斗貳升貳合　畠方

以上
右屋敷御配當に付諸屋敷道成溝成并殘地共現間相究御帳面本石を現間ニ割付ケ差引仕惣括一紙ニ仕立懸御目申候所如件
明暦四ノ
五月三日

檢地方　柳井權兵衛
同　米田市之助
屋敷割方　神田五郎兵衛

國重又右衛門殿
粟屋半左衛門殿

右檢地被仰付現間相究申に付て間延石積覺之事
現畝四拾三町七反八畝但元畝差引仕候へは四町四反九畝貳拾歩出畝にて御座候
一三拾九町貳段八畝拾歩
米九百三拾三石五斗五升一合五夕

但御帳面畝石如斯今度檢地仕候分
壹反に付て貳石三斗七升六合四夕五才當
内
貳拾八町壹段八畝
但諸屋敷爲成溝成共に
右石にして六百六拾七石八斗四升貳合
但壹反貳石三斗七升六合四夕五才當にして如此
殘拾壹町一反八畝貳歩
石にして貳百六拾五石七斗九合五夕
但百姓作幷屋敷付預り共に
右御帳面本石當りを以今度之諸屋敷道成溝成間數に割付候へは如此御座候事
一今度檢地被仰付候現間に本石を割懸候へは貳拾八町壹反八歩之當り現石六百
石壹斗九升四合五夕殘り地百姓作預り共に三百三拾三石三斗五升七合にて御

座候事
右差引仕候へは六拾七石六斗四升十合五夕檢地之出目にて御座候事
一古溝八反五畝三歩
右現石之付立之外に屋敷間數之内え入渡り候事
内貳反拾分現地溝成に成申候事
殘六段四畝貳拾三歩古溝現地にして屋敷に渡候事
六月十一日當役板本遠江ヨリ財政ニ關シ大坂留守居岩脇又右衛門へ書翰又又右衛
門ヨリ回答左ノ如シ（又右衛門回答書ハ略ス）
一筆申入候其表彌御堅固にて御用可有御調と存候
御入國前萬御用繁御心遣之程察申候隨分御ひふ不損樣に御用心候て御待請之御
用意行要存候爰元之儀も樣々御用多拙者難儀之段御察之前候併只今迄は御威光
故内々病者之我等にて候へ共去年以來は氣色快候て一日も無欠如御用相調候段
本望不過之候彌冥加に相叶候て御入國之前後身柄相續候へかしと朝暮念願迄に

て候

一御手前御存之樣に先年(元和九寛永比)益牛庵宗主殿なとへ御國御仕置被仰付候節は御仕置銀なとも如形有之候處に其後樣々御遣佐入多にて如右之御仕置銀少も無之御先代以來大段之御借銀出來數年之御逼迫にて左樣之儀は被存當候ても沙汰も不相成程之儀にて打過申候然處に御當代相兵種々心遣被仕御借銀調之次第をも銀先々え斷被申達其故近年は御物成を以御遣方も有之樣に相成候然共爰元には御仕置銀少も無之候尤豎房州存を以山代銅代銀なと取合一兩年百貫目弐百貫目程御仕置被申付置候へ共至于時御人數なと被差出候時は中々御用に立程之儀にては無之候今之分に候ては縱一兩年之內天下御役なと被仰懸候は御外實被失候樣に可有之と存苦々敷存候二三年は銅山も惡敷罷成候故房州仕置之樣にも不罷成候然は去物成之內其地え運送米山代紙上り辻を以大物充申付見申候所に江戸御物入いか程有之とにても餘分可有之と存候此脇は公儀、御普請役なとも可被仰懸哉無左候共御入國被遊候は不慮之御物入なとも可有之やうに存候胡麻屋賣殘帋大賀手前へ請取賣立候古紙四千丸余之代銀に御米銀少被引足候て大判百枚小判弐千兩一歩千切程兩替被作せ能便を以御入國內被差下候へかしと存候左候は房州少しの御仕置被仕置候に引加置申度候左候とても殿樣御仕置銀なとゝ申程之儀にては無之候へとも縱にても一圓無之とは遠たる儀候故先御手前迄御內談之申事候間右之分尤と御納得候はゝ御報に被仰越次第に御兩所え表向之狀差上せ可申候先爲御談合如是候此以後江戸への御仕送入には御米うり立銀又は紙座より七八月之御立銀も有可之候間何とそ右之金子御仕下候へかしと存候於其元にも御手前隱密にて大物充させられ可有御覽候左候て彌餘分可有之と被存候は右之御才覺可有之候爰元御藏に金子なとは一圓無之に付申事候爰元にての物あてもいかにも調させ候て見申候條其御心得尤候何れの道にても此御返事急度可被仰越候

一御用之儀に付てはいか程も心外なる儀其表向に申事耳多有之候へ共心底無別條儀候此段去冬仲市左衛門上之節も申達分候條彌其御心得互存寄之儀有之節

は内證にて可申承候此段委敷不克申候恐々謹言

戌六月十一日　　岩脇又右衛門尉　　板遠江

尚々御爲之儀に候へは自然之時御外聞可然樣にと悴氣遣申事候於御手前も可爲御同前と存候急便に御報待存候以上

七月二十日公入國ニッキ三田尻別邸應部屋工事美麗ニ過キタルヲ以テ板本遠江ヨリ三田尻都合役波多野源兵衛へ通牒書狀左ノ如シ

一筆申入候松村九郎兵衛其方角御用付て差出候乍次而其元參御茶屋御船なと見申罷戻候樣と申聞御手前へも此段申達何もとくと見合罷戻候御茶屋御作事殊更御船結構に出來申之由承悅存候萬之御仕組無殘所樣相聞令案堵候彌御心遣肝要存候

一御應部屋之樣子承候大形可然存候左候へは御手前御病中に御應部屋并殿樣御腰かけ所御應師衆相詰候所相調之由候九郎兵衛物語とくと承候處右之御腰かけ所殊之外念を入結構成由申候御手前御見合候はゝ左樣には有之間敷儀候其元之儀は御茶屋に候へは二日三日御逗留被遊儀候內々承及候所太抵殊更結構過たる樣取沙汰申候然所に御應被成御覽候御座敷爰元なとは久々の御在國にて候條縱結構にても不苦候拙者存候所は御腰かけ計之儀候間丸木につらを付まさこ葺なとにていかにもかろ〳〵と奇麗に被相調候はゝ可然樣に存候宗瑞樣御代大照院樣御部屋住其以後御家督被成御請取候ても萬事御手輕有之由候へ共年增日增結構に相成後々は御逼迫被成御家賴迄も痛一旦は御家御一大事之樣に有之候へ共相兵近年之心遣又は堅房州御國御仕置被申付當分之御用不闕樣に今日迄も相調候拙者事病者之儀候へは今度御在國中には替之事可被仰出候左候へは今少之程存候乍去何之仁被存候とても御爲之儀は同前之樣存候何と思案候て見申候へ共御應部屋之御座敷いかにも心外存候殿樣當分入御氣候ても御としまいり候程能仕樣とは被思召間敷候縱當分不應御氣色候共往々御爲之儀候はゝ可被思召分候此中江戸へも二三度に及御造作入之儀に付差出

申遣候故被指置候儀も有之候江戸老中衆へは何角申候て爰元之儀不入所に御造佐入仕候時は各被存候所磯迷惑申候第一殿様思召寄當座之御奉公之様に仕候ては何共〳〵迷惑不過之候御手前御病中にて無之候はちとは無曲通可申入様存候へ共右之分に候へは無申事候併さほと結構に出來候はゝ頓可被仰越様存候如何にも御延引候哉と存候重疊御造作にては候へ共只今之御座敷たゝみ直いかにも輕々とまさこふきほとに被申付尤候御座舗仕替候段被聞召被成御尋候共拙者よりか様申候と於其地可被申上候御尋もなく候はゝ不及御沙汰候共元之御座敷之儀江戸にも端々結構過たる様に沙汰有之通承候縱達御耳候共御爲之儀候條不苦と存候右之御座敷解候様子は御手前首尾能様手子衆へも被申付尤存候か様之儀萬事之心得に相成儀候條とかく〳〵可有御解せ候恐々謹言

七月二十日　　波多野源兵衛殿　　板遠江

尚々御鷹師衆居候所六疊敷程之家可然候自然殿様被成御座候とも其時は御鷹匠衆下座可仕候ぬれ縁などはきれいに付ケ被申可然候以上

二十三日板本遠江ヨリ御仕置銀ニ關シ大阪留守居岩脇又右衛門へ内書ノ回報左ノ如シ

一去年以來此表様々御造作入多候故在々より之公納銀にて御遣方且々之仕合に候先書にも申候入様堅房州存知を以山代銅代銀百貫目貳百貫目程一兩年御仕置被申付候近年は銅山も以之外悪敷罷成一圓公納銀無之候其外には御仕置可仕廉目無之候去物成運送大かた四萬七八千石程差上筈候處南前諸代官衆承遠候方有之て在々に殘置候御用心米迄差上せ候故都合五萬石余之運送に罷成候山代紙も例年よりは貳千九余も出來增申候何か引合大もの充隱密にて申付見申候處大かた貳三百貫目程は御銀子之餘慶可有之様存候就夫大判百枚小判貳千兩壹歩千切ほと兩易被申付御入國より内々御差下候得かしと先日申入候此段於御手前も無余儀御内存之由委敷御返被仰越令承知候併於其地御銀子之差

引被爲作御覽候處に大形貳百七八拾貫目程可有之候然時は自爰元先書に申入候辻御差下候事如何可有之哉先小判千兩被差下候樣にと面向に申入候はゝ彌々右御談合候て御買下可有之由尤存候則奉書相調此度差上せ候條彌右之辻に御沙汰候て小判千兩急度爰元可被差下候此段別紙申入候

一爰元之樣子先書に濃々申入分候拙者存寄於御手前も御同意之御內存之由本存望候此度小判貳千兩程御買下候とも江戶御仕送銀前條有之間敷候へ共先々千兩此節取下可然之通是又尤存候いかやうにも御手前御校了次第と存事候此以後も責て壹貳百貫目充は年々爰元被下御仕證之方へ相添候樣に有之度儀と被存候通御內意承屆候於拙者は猶以左樣存儀候條彌大物充申付吟味仕時々可申入候條內々其御心得可有之候先々此度は御手前任御紙面小判千兩被指下候樣にと申入候都合は貳千兩程被爲入候條其內千兩急度御入國より內に被差下殘千兩之分は御兩所と得御內談候て當秋中被差下候樣にと別紙申入候彌右之辻御心得寺彌二右共御相談候て御仕下尤存候

一先日申入候大判二十枚之儀急度被買調右之小判同前に御入國より內可有御指下候委細之儀は先書に申入其元よりも具之御返にて承屆候故此度不具候

一御用之儀付て差當所無遠慮申入候於心底は少も別條無之通兩度申入於御手前も少も御隔心無之由被仰越本望存候彌以御爲之儀候條萬事無御遠慮御用御調肝要存候存寄之儀於有之は無用捨可申入候自其元も可被仰越候恐々謹言

戊七月二十三日　　板　遠　江

岩脇又右衛門殿

八月二十日板本遠江就職中御藏元へ傳達ノ條書左ノ如シ

條々

一御先代已來度々被仰出候御法度之旨今以無相違候條謹て可被相守事

一不依何事於御役所善惡之批判一切停止之事

一御藏元諸役人衆面々之番所無緩可被相勤事

付相衆有之御役人之儀常々は各番被仰付事候間壹人宛被相詰御用無闕如樣

可有所勤候尤御用多節は兩人共に定詰に可被仕候事

付夜番不被仕御用人之儀は朝六ッ過五ッ前に御藏元被罷出晩は七ッ過六ッ前に可被罷下事

付御倉本横目壹人宛付置日々之着到究申付候朝は面々之番所え着到究に横目可參候晩は七ッ過に御藏元面御番所え被罷出着到判形相調可被罷下事

一火用心其外萬事押等之儀兩番頭衆撿使衆當番之御中間頭衆被申談諸事猥無之樣に手堅可被申付事

付爲火用心夜廻申付儀候條番頭衆撿使衆御中間頭衆被申談一夜之内替り〳〵夜廻仕見合行規能樣可被申付事

一喧嘩口論出來無之樣に面々可被相嗜候自然私之意趣有之候共於御倉本は互其沙汰被仕間敷事

一於御藏元自然不慮之儀有之時は先番頭衆撿使衆當番之御中間頭衆被申談可被取治候若各校了に難成儀於有之は其趣御藏元兩人衆迄可被申出事

一於御倉本舞謳小歌其外高聲一切停止之事

一御番食之儀當番切面着を以朝は五ッ晩は七ッ過に可被申付候尤先年より之御定一汁一菜仕出可被申付候事

付於于時御用人或は非番之衆罷出相詰御用被相調罷下候事不相成候時は御藏元兩人衆え其趣相答樣子被聞屆候上御番食可被申付候兩人衆不被居合時は番頭衆撿使衆え申屆ヶ手形を出置候上御番食仕廻候樣に可有其沙汰候左候て追て臨時帳に右究之衆印判を取其壯を以貶方可被備御算用候事

付諸細工人之儀も就御用御藏元罷出朝六ッより晩七ッ過迄相詰候者えは御番食可被申付事

一諸役人衆手前御用つかへ候とても御雇之者被召仕候事一切停止之事

付雇候はて不叶時は此方より人柄校了候て於于時可申付候事

右堅固に可被相守者也

明暦四戌ノ

八月二十日

十二月四日應司内府ヨリ先年竹子姫結婚ノトキ協約アリシ負催償還之件當役中ヨリ大坂都合役へ通牒左ノ如シ

一筆申入候内府様より今度御入國御祝儀として廣庭中務被差下候然は中務方より福間彦右衛門神谷庄右衛門兩人を以各迄被申候は先年竹君様御祝言御調之節應司様御借銀貳百三十貫目從殿様御調替可被進之由候右之内百貫目は近年度々に御調被進候殘百三拾貫目于今御延引被成候左候へは右の銀子に大分利足付此節二百貫目及之御借銀に罷成候間當暮より年々五拾貫目宛四ヶ年に御調替被進候様との儀候無左候はゝ只今右之百三十貫目無殘御調切其上此中之御心付米三百石宛四ヶ年御貸被成候様にとの儀候就夫各より申様には最前御祝言御調之節於江戸青木志摩及相兵庫兒淡路萬事申談互書替し等をも仕置候其辻を以御相違無之儀候へは去々年江戸火事にて此方御借銀御調も被仰理被差延たる儀候故其節は御延引被成候當年は御存之様に御祝言御調其上御入國に付て萬事御物入も

板　遠　江

多有之候第一國中作も悪敷候故此方御拂方之儀も如何可有之哉と各心遣仕儀候然共何とそ當暮六十貫目來春夏之間七拾貫目相渡進上申候様にと大坂兩人へも申付候條可被得其意候通中務申談候間年内六拾貫目來春夏之間七拾貫目都合百三拾貫目之辻京都差上せ青木志摩廣庭中務方へ相渡可被申候委細神庄右衛門方可有物語候恐々謹言

十二月四日

岩脇又右衛門殿　　板　遠　江
寺内彌二右衛門殿　　兒　淡　路
　　堅　安　房

閏十二月二十七日米高價トナリ萩町人慘狀ヲ來シタルヲ以テ公米ヲ低價ニ販賣セン爲メ訓令左ノ如シ

覺

一八木高直付て當町小身成者一入痛申之由候年内先公儀御買米直段貳石三斗五升にして楊井平兵衛平田猪右衛門え賣候樣に申付候條町年寄請取小身成町人共え買せ候樣可被申渡候事

付銀子正月晦日を切に調可被申付事

付町老寄相究買手之付立判形取町奉行え差出追て此方え可被申事

付分限之町人米買置なと仕者可有之候條少之利付賣候樣に可被申渡事

一年明候はゝ公儀御買米輙賣せ可申候條町人草臥不申樣に可被申渡事

一御買米不足候はゝ何分にも手遣可申付候條此段可被申聞事

萬治元戊戌年

閏十二月二十七日

閏十二月二十八日酒造減少ニ關シ本月三日幕令アリ荻町酒屋ノ員數及例年醸造石高減少ニツキ延米員數町奉行ヨリ提出左ノ如シ

一百拾壹軒　當町酒屋中

一米壹萬六千三百拾三石六斗五升例年之作リ分

一同千九百七拾九石七斗　今度手堅被仰付候に付て延米之分

萬治元戊戌

閏極月二十八日

高須八郎左衛門